

かけがわ学力向上ものがたり  
—我が校のものがたり 実践編—



「茶のみやきんじろう」©掛川市

平成31年2月  
掛川市教育委員会

## 「子どもたちの未来のために」

「わたしもそう考えてたんだけど途中で変わったの。前に出て説明していい？」「先生！ちょっと難しかったけど、やり方がわかったらできるようになった！」

教室では、子どもたちが様々な問題に対して自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたり解決しようとして取り組んでいます。そこには、一人一人の子ども「ものがたり」があり、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」があります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭、地域で共通理解をして、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、主体的・協働的に学習に取り組む子どもたちを育ててまいりました。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、学力向上への積極的な授業改善を進めてきました。

本年度の夏に発行した「我が校のものがたり」において、各校の校内研修における目標と、それを実現するための具体的な方策をまとめていただきました。この「我が校のものがたり 実践編」には、校内でどのように研修を進めていったのか、またその結果、どんな成果や課題が見られたのかが記されています。

各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どもの学力向上に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

## 目 次

日坂小学校 岡戸 良太 -----	1
「進んで関わり学び合う子」の育成を目指して	
東山口小学校 山口 真弓 -----	3
進んでかかわり学び合う子を目指して	
西山口小学校 青島 央典 -----	5
「きき合い 学び合う授業」を目指して	
上内田小学校 村田 智 -----	7
みんながつながる授業づくり	
城北小学校 池田 紀子 -----	9
学び合う授業づくりを目指して	
第一小学校 石塚 将大 -----	11
「ともに学び合う」 ～学び合いを通して、「わかった」「できた」が実感できる授業づくり～	
第二小学校 松本 昌幸 -----	13
主体的に学ぶ掛二小の子どもたち	
中央小学校 佐藤 仁美 -----	15
対話をうみだす授業づくり ～ICT活用を通して～	
曾我小学校 野代 理恵 -----	17
伝え合うことができる子を目指して	
桜木小学校 渡邊 貴則 -----	19
どの子も学び続ける授業を目指して	
和田岡小学校 白松 麻友子 -----	21
みんな楽しい！分かる！できる！授業づくり ～交流を通して高め合い、力をつける授業を目指して～	
原谷小学校 千葉 貴江 -----	23
主体的にとことん学び合う子どもの育成	
原田小学校 池田 健 -----	25
論理的な思考力・表現力の育成	
西郷小学校 太田 愛 -----	27
「仕掛け」「繋ぐ」を意識した校内研修	
倉真小学校 法月 淳 -----	29
「倉真スタイル」授業の確立へ	

土方小学校	原田 昌	-----	3 1
	伝え合い、「問い」を解決する授業		
佐東小学校	竹内 洋介	-----	3 3
	対話を通してまなんでいく授業		
中小学校	増田 七奈子	-----	3 5
	コミュニケーション力の育成 ～子どもの中に問いや目標が生まれる授業を目指して～		
大坂小学校	椎原 佳隆	-----	3 7
	心の鐘を響かせよう！		
千浜小学校	山下 陽子	-----	3 9
	「主体的に学び合う子」を目指して		
横須賀小学校	鈴木 将吾	-----	4 1
	主体的・対話的で深い学びの実現 一進んでコミュニケーションを図ろうとする子を目指して一		
大淵小学校	石田 智子	-----	4 3
	「自分の考えをもち 学び合う子を育てる授業」を目指して		
栄川中学校	細井 道浩	-----	4 5
	主体的に学び合う生徒		
東中学校	杉山 晃弘	-----	4 7
	「学び合い」を支える信頼づくりと研修方法の工夫		
西中学校	長谷川 景子	-----	4 9
	自ら学び 共に学び合う生徒の育成		
桜が丘中学校	宮崎 直哉	-----	5 1
	学びの時間の充実を目指して		
原野谷中学校	梅田 晃	-----	5 3
	「夢を抱き りりしく歩む 原野谷っ子」であってほしい！		
北中学校	飯田 好洋	-----	5 5
	学校の中で終わらない学びを目指して		
城東中学校	小杉 栄乃	-----	5 7
	「生徒が主体的に追究・表現する授業」 ～一人一人の学びの深まりを目指して～		
大浜中学校	大杉 鏡康	-----	5 9
	「深い学び」を追究する校内研修		
大須賀中学校	川中 瑞貴	-----	6 1
	カリキュラム・マネジメントを取り入れた授業改革		

# 「進んで関わり学び合う子」

## の育成を目指して

掛川市立日坂小学校 岡戸 良太

### 目指す姿について

昨年度から継続して、子どもたち自身に、学ぶ必要感を持たせたいと考え、子どもたちが夢中になって「話したい」「聴いて比べてみたい」「もっと調べたい」「考えてみたい」といった主体的な学びを目指した。解決したいという思いが持てれば、追究しよう、交流しよう、という意欲につながっていくと考えた。そのために、子どもたちが考えたくなるような課題の設定について研修を行ってきた。そして、課題を解決するための交流方法の工夫についても継続して研修を行った。さらに、自分の思いや考えをわかりやすく表現する場の設定を、グループ交流や全体交流の中に位置づけ、どのようにしたらわかりやすく伝えることができるかを研修していった。

〈目指す子どもの姿〉

- ①考えを比べながら聴き、伝え合う姿
- ②仲間と協力して、課題を解決する姿
- ③自分の思いや考えをわかりやすく表現する姿



### 今年度の取り組み

〈手立て〉

- 1 子どもたちが考えたくなるような課題の設定
- 2 課題を解決するための交流方法の工夫
- 3 自分の思いや考えをわかりやすく表現する場の設定

#### 1 子どもたちが考えたくなるような課題の設定

○導入を工夫し子どもたちの発言や疑問から課題を作っていくことで、課題解決の意欲を高めることにつなげた。

〈4年算数〉

- ⊕「グループが大きすぎる。もっと仲間分けできるんじゃない？」

→学習課題

「自分たちで作った四角形をもっとくわしく仲間分けする方法を考えよう。」

▲課題に行くまでに時間をかけすぎてしまうことがあった。

○単元全体を見通して、課題を設定していくことで、子どもたち自身が何を学ぶか



把握しながら意欲的に学習することができた。

〈5年外国語〉

- ・メインアクティビティから単元を構成していく。メインアクティビティから逆算して、身につけさせたいセンテンスなどを1時間ごと学習していくことで、教師も児童も見通しや目的をもって学習することができた。

## 2 課題を解決するための交流方法の工夫

○目的や状況に合わせて、交流の形態を工夫することができた。

〈3年算数〉

- ・交流活動を3人組にすることで、1人1人の発言が増え、課題に向かって意欲的に取り組むことができた。



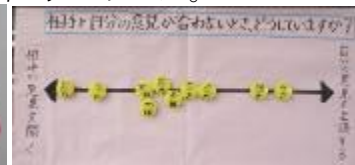
▲交流の意図を明確に持っておかないと、活動だけの授業になってしまう。

## 3 自分の思いや考えをわかりやすく表現する場の設定

○教具を工夫することで、自分の思いを表現することに効果的であった。

〈2・6年道徳〉

例：気持ちのシーソー、心のバロメーター



▲自分の思いを伝えたい気持ちが強く、相手の考えを聞く力をより伸ばしたい。

▲小集団の中で自分の思いを積極的に伝える児童が多くなってきたが、全体の場では、まだ表現する力が弱い。

## 成果と課題

研修を通して、全職員が工夫して課題を設定することを意識しながら、授業を構想することができるようになった。それによって、子どもたちが主体的に学習に取り組み、仲間と協力しながら課題を解決しようとする姿が多く見られたことは、1つの成果である。

また、つけたい力や本時のねらいに合わせて、交流方法を工夫することができた。ペア交流や3人組、自由交流、ジグソーグループなど様々な形態を試行した。

また、いきなり交流活動に入ったり、個人学び→グループ→全体にしたりと、交流の位置づけについても研修を進めた。様々な方法を試行し、よさや課題を共有することができた。ただし、交流の時に教師がどう支援すべきか、また、交流を通して児童の思考がどう変容したのかを見取ることに課題が残った。

## 来年度へ向けて

今年度の成果と課題を生かし、来年度は、「①単元全体を見通して学習課題を設定していくこと」、「②教師の出番や単元での位置づけなど交流の意図や目的を明確にもつこと」の2点を重点に取り組んでいきたい。

# 進んでかかわり学び合う子を目指して

掛川市立東山口小学校 山口 真弓

## 1 はじめに

本年度の本校の研修テーマは「進んでかかわり、学び合う子」である。そして、そのテーマ実現のための目指す子どもの姿を①課題を自分のものとし、仲間と協力して解決しようとする姿、②自分の思いや考えを分かりやすく表現する姿、③考えを比べながら聴き（訊き）伝え合う姿とした。そして、そのような子どもの姿を実現するための手立てとして、昨年度を取組をベースにし、「課題設定の工夫」と「学び合いの質の向上」の2点に取り組んできた。

## 2 教科の視点を取り入れて

研修を進めていく中で、テーマ実現のためには、今まで以上に教科の本質に迫る教材研究の必要性を感じた。その教科、単元で育成したい資質・能力は何か、働かせたい見方・考え方は何か等について教材研究していくことで、子どもたちの深い学びが実現すると考えたからである。そこで、本年度は、手立てについて捉え方を以下のように見直し、実践を行った。

### (1) 課題設定の工夫

- ①子どもの日常生活や身近な事柄を課題へと高め、子どもに学びの必要感をもたせる。
- ②子どもが教科の見方・考え方を思わず働かせたくなるような学習問題を生み出すような課題設定。
- ③これまで身に付けてきた見方を働かせ、課題解決のためにはどのような考え方が使えるかを全員で確かめ、解決の見通しを持たせることで、どの子も学びの土俵に乗ることができるようにする。

### (2) 学び合いの質の向上

- ①教科の見方・考え方を働かせて話し合うことで、自分の考えを広げたり、深めたり、新しい考えを生み出したりするような学び合い。
- ②学び合い＝グループ活動ではない。学習活動全てを学び合いにとらえ、「型」にはこだわらない。

## 3 具体的実践

3年 かけ算の筆算

<本時で働かせたい見方・考え方>

数の仕組み（10のまとまりとばらにわけ）や乗法九九及び乗法の性質（分配法則）に着目し、（2位数×1位数）の計算の意味と方法について考察する。

#### <課題設定の工夫>

21×3の計算の仕方を考えさせるために、既習のかけ算を扱い、いくつかの式を組み合わせれば解決できそうだという見通しを持たせるようにした。そうすることで、被乗数を分けて計算する筆算の仕組みの理解につなげた。

#### <学び合いの様子>

「九九に変身できないか」「まとまりで考えることができないか」という見通しをもてた。21+21+21や3の段を延長して求めようとしていた子ども、「21は20と1にわけることができる」ことを手がかりにして、九九、まとまりをつくることや位をわけるという見方を働かせながら、問題解決する姿が見られた。

#### <ゴールの姿>

かけられる数を十の位と一の位に分けて九九を使って計算することができる。

### 3 成果と課題

- ◎子どもたちが見方・考え方を働かせて話し合うような学習問題を生み出すためには、課題設定を工夫し、どの子ども自分事として課題に取り組ませることが大切だということが分かった。
- ◎どの子ども主体的に課題を解決するためには、見通しが大切だと言うことが分かった。
- ◎考えを深めたり、新しい考えを生み出したりするためには、学び合いが必要だということを確認することができた。
- △学び合いをより質の高いものにするために、一人一人が考えを持って話し合いができるように、個の力を高めることが大切である。そのための教材研究を積み重ねていく。

### 4 来年度に向けて

来年度も、子どもたちが学び合いの中で教科の見方・考え方を働かせて問題解決に取り組み、概念としての知識を身に付ける授業が展開できるよう、教材研究を重ねていきたい。

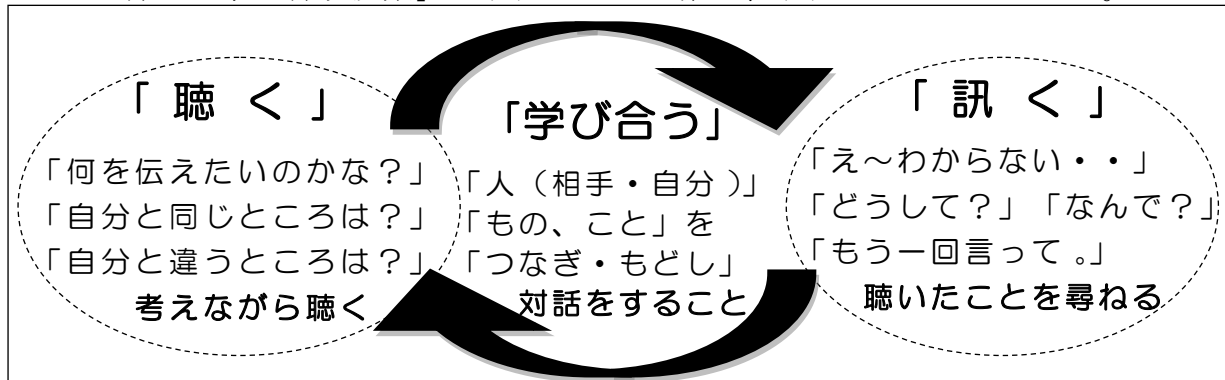


# 「きき合い 学び合う授業」を目指して

掛川市立西山口小学校 青島 央典

## はじめに

本校では、平成29年度より、重点目標を「思いを受け止め 思いを伝えよう」と設定しています。この重点目標を達成するためには、児童一人一人の「思いや考えを受け止めてもらえる」集団の育成が必要であり、その具体として集団が児童一人一人の思いや考えを『聴く』行動が大切になってきます。「聴いてもらえる」集団の雰囲気ができて、初めて個々の児童が、「自分の思いや考えを表現することができる」、また「自分の分からないことや困ったことを『訊く』ことができる」ようになると考えました。そこで、この2つのきく（聴く・訊く）に焦点を当て、「きき合い 学び合う授業」を研修テーマに据え、研修を進めてきました。



「きき合い 学び合う授業」を具現化するための手立てとして、

- ・「やってみたい！」学習問題の設定
- ・きく活動を取り入れた学び合いの場の設定

の2つを研修の視点として取り組んできました。

## 「やってみたい！」学習問題の設定

5月の提案授業、7月の大研を通して、子どもたちが「やってみたい！」と主体的に解決しようとする学習問題とは何かを追求していきました。そして、以下の3点を共通理解した後、学年研修の授業公開を行いました。

- ①子どもたちの「？」から生まれた学習問題・・・子どもの困り感
- ②何をすればいいのか、何を考えればいいのか分かる学習問題・・・焦点化
- ③友だちと一緒に考えたい、考えを聴きたいと思う学習問題・・・対話の必然性

学年研修の授業公開では、子どもたちの意欲的に学ぼうとする姿が、様々な場面で見られました。教師が学習問題を精選し提示することで、子どもたちが、授業で何を学ぶのか見通しをもって活動することができたのだと思います。

## きく活動を取り入れた学び合いの場の設定

本校では、指導案に「本時のきく活動を取り入れた学び合いの場の設定」について書くようにしています。教師が、場面（課題提示後・追求場面・まとめ）、人数（ペア・班・全体）、形態（フリー・同じ考え同士・違う考え同士）、目的（確認・深める・広げる）等を明確にして、きき合う場を設定することがねらいです。

### 2年国語『ことばあそびうた』

学習問題を提示した後、子どもたちが「解決したい。」「考えたい。」という思いをもったタイミングできき合う場面を設定しました。教材文を2人に1枚ずつ配付することで、ペアで自然ときき合う姿が見られました。



### 5年体育『マット運動』

意図的に編成したグループで、お互いの課題を確認した後で活動に入りました。タブレットを用いて動きが視覚的に分かるようにしたり、技能向上のポイントを絞ったりしてきき合いの焦点化につなげました。活動中に自然なきき合いが生まれ深い学びにつながっていきました。



きき合いの場を積み重ねていく中で、子どもたちから動き出し、話合いに発展していく姿も見られるようになってきました。その姿は、本校が目指している「きき合い」が具現化された一つの姿でした。

## 来年度へつなぐ

今年度の研修の成果として、子どもたちが意欲的に学ぶ姿が見られ、少人数でのきき合いが充実してきました。一方で、全体でのきき合いで、考えをつなぎ深めていくことに課題を残しました。そこで来年度は、

子どもが意欲的に学ぶ  
きき合い



子どもが主体的に学ぶ  
解決のためのきき合い

へ進化させていきたいと考えています。子どもたちが考えをつなぎ、考えを深めていく授業の実現を目指して研修を進めていきたいと思ひます。

# みんながつながる授業づくり

掛川市立上内田小学校 村田 智

## 1・2・3の学校




「上内田小ってどんな学校？」と聞かれたら、子どもたちは、「1・2・3の学校」と答えます。本校の自慢である「一輪車の1」、二宮金次郎をモデルに子どもたちの自尊感情を高める「にこじろう運動の2」、そして「参加型授業の3」です。学級全体で関わりながら授業を創っていくとする意識を高めるために、研修テーマを「みんながつながる授業づくり～参加型授業の創造～」として、日々の授業に取り組みました。



## つながるために～よい伝え方・聴き方～

よい伝え方・聴き方を、みんながつながる授業の基礎力として位置付け、スキルアップを目指していきました。さらに、みんながつながる授業を具現化していくために、「伝え方」「聴き方」の2つを柱として、各学級でめあてを設定しました。

年度始めは、児童の伝える対象が教師に向いていました。つながっていくためには、児童の伝える対象が児童に向かなければいけないと考え、窓口教科としている道徳を中心に、自分の考えを友だちに伝え、児童を主人公にした授業展開を目指していきました。

 <b>伝え方・聴き方名人</b>		
	伝える	聴く
名人	☆資料や具体物を使って、わかりやすく工夫して伝える。 ☆友達のことを言いかえたり、くわしくしたりして伝える。 「○○さんの言うことは、こういうことですね。」 「ほかの言いかたをすると、～」	☆みんなの意見を参考に、自分の考えをまとめながら聴く。 ☆話している人の考えをみとめながら聴く。 
6	☆話している人の反応をたしかめながらくさくさして伝える。 「～ですね。」	☆自分の考えとくらべながら聴く。
5	☆話している人の反応をたしかめながら伝える。 ☆順序を考えながら伝える。 「まず、～」 「つぎに、～」	☆話す人がなにを言いたいのか考えながら聴く。 
4	☆自分の考えを最初に言い、そのあとに理由を伝える。 「～だとも思います。わけは、～だからです。」	☆聴きとりにくかったり、わからないことがあったりしたら、質問をする。
3	☆友達のことを聴きつなげて伝える。 「○○さんといていて、～」 「○○さんにつけたして、～」 「○○さんとはちがう考えで、～」	☆反応しながら聴く。 ・うなずく「うん。うん。」 ・首をかしげる ・声を出す。「ああ、そうか。」
2	☆話したあと、みんなに確かめる。 「～と想います。どうですか。」 ☆みんなのほうを見て伝える。	☆最後まで、しっかり聴く。
1	☆相手に聴こえる声ではっきりと伝える。 ☆大きな声で返事をしてから伝える。	☆話している人のほうを見て聴く。

## つながる授業のために～教師側の心得～

伝える対象を教師ではなく児童に向けてすることで、児童の関わりが増え、学級全体で関わりながら授業を創っていかこうとする意識が高まってきました。

さらにつながりをも深めていくために、教師側の戦略が必要であると考え、ポイントを8つにまとめ、

共通理解を図りました。ホワイトボードを積極的に活用したり、隊形を工夫したりすることで、児童のつながりが深まってきました。

- 1 自分の考えをもたせた上で、ペア（縦、横、斜め）やグループの話し合いに移ろう。
- 2 ホワイトボードを活用し、互いの意見をつなげよう。
- 3 自分の考えをもたせた上で、指名しよう。
- 4 話し合う場面では、コの字型の隊形になろう。
- 5 ネームプレートを活用し、誰がどの立場か分かるようにしよう。
- 6 話し手だけでなく、聴き手の様子も見届けよう。
- 7 教師の立ち位置に変化をつけよう。
- 8 授業の終わりにめざす授業像について振り返る時間を設けよう。



## 反応することで、深いつながりへ

今年度の実践を通して、児童の思ったことや考えたことを伝えるという意識が高まりました。また、「話し手をよく見て」「うなずきながら」というような聴く力は高まりましたが、発表者に対する反応の少なさが課題です。学級全体で関わりながらよりよい考えを求め、「でもさあ～」「この考え方の方が…」というような反応が出てくれば、より深いつながりになっていくと思います。話し手の立場からも、聴き手の立場からも思ったことや考えたことを伝えることができるという実感をもたせ、友だちの意見に反応することで、深いつながりを実現させたいと思います。そして、関わりながら学ぶことが楽しいと思える授業づくりがこれからの目標です。



# 学び合う授業づくりを目指して

掛川市立城北小学校 池田 紀子

## はじめに

本校の児童は、課題に対して真面目に取り組むことができるというよさがある反面、「自分の考えを進んで表現する子が少ない」「意見のはき出しが主になってしまい、話し合いの深まりに欠ける面が見られる」などの課題が見られた。そこで本年度は、「学び合う授業づくり～『確かな学力』の育成～」を研修主題として設定し、「学び合いの実現」に焦点を当てることとした。そして、主体的・対話的に学ぶ手立てを工夫すれば学び合いが生まれるのではないかと仮説をたてた。学び合いが実現するための手立てに焦点を当て授業を見合ったり、その手立てが有効であったか話し合ったりして、実践を積み重ねていくことで研修を深めていった。

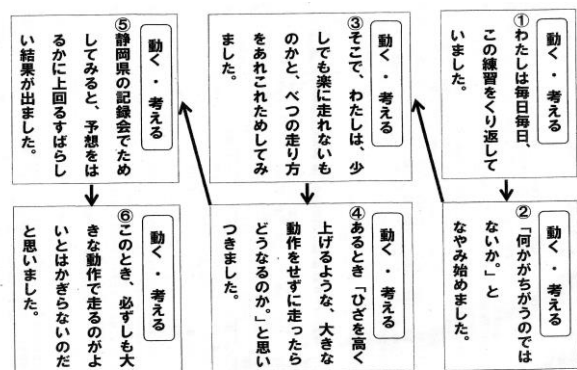
## センテンスカードで学び合いを生む

### 「動いて、考えて、また動く」（4年生）の実践

筆者が、「動く」「考える」を繰り返し、疑問を解決していったという内容を読み取り、筆者の思いと題名とのつながりをつかむ学習であった。児童は、文章（センテンス）が「動く」「考える」のどちらの文章なのか分類する活動を行った。ペアで活動した後、全体で話し合う中で、意見のズレが生じ、学び合いが生まれた。

また、「動く」「考える」に注目させたことで、自然と児童から「題名と同じだ！」の声が上がり、学びの深まりを感じた。

授業後話題にあがったことは、「ペア活動は必要であったか。」ということだった。ペア・グループ活動は学び合い実現のための1つの方法ではあるが、学び合いを生むためには、児童の「必要感」が大事だということがわかった。導入や学習問題の大切さを改めて実感した。



## 動作化で学び合いを生む

### 「海のかくれんぼ」（1年生）の実践

もくずしよいが、海藻を体につけてかくれるという内容を読み取り、他の生き物との違いに気づくことを目標とした学習であった。その中で、もくずしよいの写真

に、海藻を貼っていくという動作化を行った。動作化をすることで、児童の興味が高まり、「まだ見えてるよ!」「もっと貼らないと!」と見ていた児童から自然なつぶやきが出た。視覚的にもわかるため、どの子も同じ土台にのって学び合うことができたと感じた。ただ、子どもたちのつぶやきをどのように全体に広げていくかが課題としてあがった。1人の児童の考えをどのように他の児童につなげていくか、つぶやきを広げる教師の切り返しの大切さを感じた。また、動作化の目的を教師がしっかりともつことが重要だと実感した。



## ネームプレートで学び合いを生む

### 「大造じいさんとがん」(5年生)の実践

心情を表す表現や情景描写に着目し、大造じいさんの残雪に対する見方の変容を読み取る学習であった。残雪に対する見方が大きく変わったと分かる文章にネームプレートを貼り、同じ表現に注目した児童と意見を交流した後、全体での話し合いに移った。ネームプレートを貼ったことにより、どの児童も意思表示ができ、その後の交流でも注目している表現が同じなので、スムーズな話し合いができた。また、視覚的に誰がどこの表現に注目しているかがわかり、新しい視点に気づかせたり、考えさせたりする際、有効だと感じた。本研修では、静西教育事務所地域支援課村田一史参事を招いた。事後研修では、教師が話し合いのどこで児童を立ち止まらせるか、どこで考えさせるかが大事ではないかというお話をいただいた。児童の意見のズレをとらえ注目させることや学習を通して付けたい力や願う姿を具体的にすることが、学び合いを生むために不可欠であることが分かった。

## 来年度に向けて

本年度の研修の成果は、「ズレや気づきを生み出したり同じ土台にのせたりすると、学び合いが生まれやすい」ということが明確になったことである。しかし、全体の場になった時に発言しなかったり、理解しようと聞いていなかったりと児童の受け身な姿勢がまだ見られ、学び合いが十分にできているとはいえないことが課題である。これらの成果と課題をふまえ、来年度は、児童が考えたいと思うような導入や学習問題の工夫、教師が授業の方向性を持ち焦点化していく力など、学び合いの実現に向けて重点をしぼっていく必要があると感じる。今後の教育課程で話し合い、来年度の研修につなげていきたい。

# 『ともに学び合う』

～学び合いを通して、「わかった」「できた」が実感できる授業づくり～

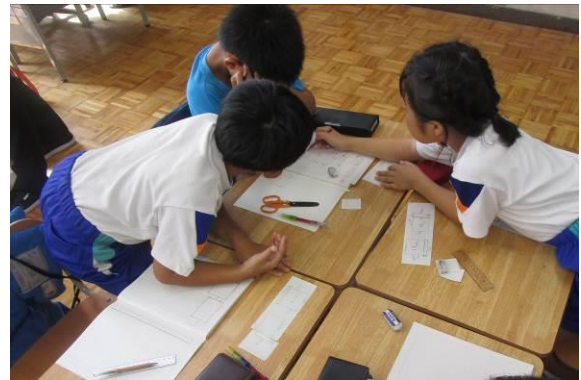
掛川市立第一小学校 石塚 将大

## 自分で考え 進んで行動

本校の重点目標である。授業の中でもこうした姿が見られるように、本校の校内研修では、「学び合い」を取り入れている。本校では、「学び合い」の授業を、以下の3点で定義している。

- ・学級のどの子も見捨てられない、孤立しない、全員参加の授業
- ・互いに聴き合うことを大切にして、仲間に受け入れられたことが実感できる授業
- ・仲間とともに課題解決することで、「わかった」「できた」を実感できる授業

今年度は、実践している学び合いが子どもの「わかった」「できた」につながるようにするために、私たち教師は、どんな手立てをうち、どんな支援を行っていくことが必要なのか、1年間研修を深めてきた。



## 子どもも教師も「学び合う」ために

ともに学び合う授業を目指し、研修の土台となる様々な手立てを講じてきた。

- ・目指す授業像を子どもとともに考え、各教室に掲示した。
- ・佐藤雅彰先生を講師として招聘し、中心・公開授業だけでなく、校内研修への助言をいただいた。

上記の内容は主な手立てであるが、こうした土台をもとにして、校内研修を行ってきた。

### ○共通実践事項の設定

コの字型の座席配置にすることや、教師の意図的氏名で授業を進めること、1・2年はペア、3年生以上はグループを、考え作りの段階から取り入れることなど、どのクラスでも同じように取り組むこととして設定した。



### ○ジャンプ問題への挑戦

授業の前半に本時で学習する基本的な考え方を確認し、後半にその力を活用する

問題（ジャンプ問題）を扱う構成での授業を行った。ジャンプ問題については、昨年度より佐藤雅彰先生から御指導いただき、今年度中心授業でも行うこととした。

○子どもの「わかった」「できた」を見取るための手立ての設定

授業案の終末に、見取るための手立てや、「わかった」「できた」を実感できた子どもの姿を具体的に明記した。また、中心授業では、教室のグループごとに、着目する職員を決め、事後研では子どもたちがどのような表れだったのかを具体的に話ができるようにした。



## 本年度の取り組みの成果と課題

### <成果>

- ・どのクラスにおいてもペアやグループでの学び合いを行うことで、9割の子どもが自分の考えをもつことができたと答えている。
- ・友達の発言を聴くこと、分からない時には友達に聞くことができるようになってきた。
- ・ジャンプ問題を行うことで、学習意欲が向上したり、自然と学び合う姿が見られたりした。
- ・授業のねらいにあった振り返りを行うことで、学習問題を意識して取り組んだり、自信をもって授業を終えたりする子が増えた。

### <課題>

- ・学び合いに入れられない子や、グループの隊形で学び合っても自分の考えがもてない子がいる。
- ・ねらいや付けたい力に向かって、学び合いを取り入れないと、学び合いの目的がぼやけたりグループでの学び合いが意図していない方向に流れたりしてしまう。

### さらに学び合いを深め、「わかった」「できた」を実感させるために

今年度の研修を継続しつつ、「教師が教えるのではなく、子ども同士が学び合っていくために教師はつなぐ役割を意識していくこと」「付けたい力を明確にし、子どもの姿で具体的にイメージした評価を考えておくこと」の2点が必要であるということが見えてきた。「自分で考え進んで行動」が授業においても行われるようにさらに研修を深めていきたい。



# 主体的に学ぶ掛二小の子どもたち

掛川市立第二小学校 松本 昌幸

## 1 主体的に学ぶ児童を育てる授業

「主体的に学ぶ児童を育てる授業づくり」を研修主題として、3年目となります。付けたい力に即した、効果的な交流活動を工夫することで、児童が自ら進んで関わり合っていく授業を目指し研修を進めてきました。

## 2 全職員での授業実践

### (1) 導入5分、展開30分、まとめ10分

3年生の算数では、ICTを活用するなどして、短時間で課題を共有する導入を目指しました。児童は、「 $30 \div 3$ までは計算できるけど、その続きはどうやったら計算できるのかな。」という問いを共有することで、自力解決までの見通しを考え、友達と協力して解決しようという思いをもちました。考える時間を確保して、授業でしっかりと力を付けることを意識した時間配分にしていきました。

また、まとめの時間を10分確保することにも取り組みました。自分の言葉でまとめを書くことで、確実に学習内容を定着させることを目指しました。

### (2) 児童の「やってみたい」を大切に

1年生の国語では、「宝物を友達に教え合おう」という学習活動を設定しました。各学級で考えた発表を、他の学級に伝えるという活動です。より詳しく説明するために、友達の説明を聞いて質問をし合いました。自分の宝物を手元に置いて説明することで、相手に伝わる話し方を意識することができました。友達からたくさん質問を受けることで、「誰に、いつ、どこで手に入れた宝物なのか。」など、より具体的な発表ができるようになってきました。児童の「伝えたい！」という思いを大切にした実践でした。



### (3) 付きたい力に即した交流活動を

6年生国語「鳥獣戯画を読む」では、筆者の書き方の工夫を見付けるために、自分の考えとの共通点や相違点を友達との交流で探していきました。授業のねらいに合わせて、交流の形態や方法を工夫しました。掛二小では、主に3つの交流を使い分けています。「確認の交流」は、ペアで気軽に意見を交換します。全員に話す機会が与えられるので、主体的に授業に関わることができます。「広げる交流」は、自分とは異なる意見や思いつかなかった考えに気付かせる交流です。「深める交流」は、グループで考えを絞ったり、より質の高いものを構築したりする交流です。このような交流活動を通して、友達と関わり合いながら学習を深めることができました。

## 3 新学習指導要領の実施に向けて

再来年度より完全実施される外国語や「特別の教科道徳」の研修を深めました。外国語では、児童がより主体的に取り組むための学習課題の設定を工夫しました。4年生の道徳では、自分の特徴や良さを、友達から教えてもらいながら気付いていこうとする実践を行いました。掛二小では、「すずかけ賞」という取組を実践しています。これは、児童のがんばりや模範となる行動を全校で見取り、賞揚していくものです。本校が目指す自己肯定感を高める目標と関連付けた実践となりました。



## 4 これからも授業で力を付けていく

掛二小の児童が、友達と主体的に関わり合っていく中で、力を付けていく授業が見られました。今後も、児童がより「わかった！できた！」と実感できるような授業を目指していきたいです。そのために、「解決したい課題や問い」と「課題を解決するための対話と思考」を授業でどう位置付けていくのかについて、全職員で研修を深めていこうと思います。

## 対話をうみだす授業づくり ～ICT活用を通して～

掛川市立中央小学校 佐藤 仁美

### はじめに

本校では、平成 29 年度の新校舎完成に伴い、ICT 活用に関する環境が整ったことで、ICT を積極的に活用する授業づくりに取り組んできました。それによって、子どもたちの学習意欲が増し、教師の ICT 活用のスキルアップにもつながりました。

そこで本年度は、そのスキルを生かし、意欲だけでなく、子どもたちの対話をうみだすための手段として ICT を有効に活用する方法について、3 回の中心授業での実践を柱に研修を進めました。

### 実践

#### (1) ICT 活用を絡めたジグソー学習

5 年生は、社会科「食料生産を支える人々 米づくりの盛んな地域」において、タブレットを活用したジグソー学習による授業実践を行いました。まず、3 種類の資料の場所へグループの代表者が行き、そこに集まったメンバーで資料から分かる事実やそこから考えられる米農家の悩みに迫るエキスパート活動を行いました。1 つの資料をじっくり見たり注目するところを拡大して見たりすることで、対話をうみだしました。そして、元のグループへ戻って報告し合い、それぞれの資料の関係性を考え、まとめていくことができました。



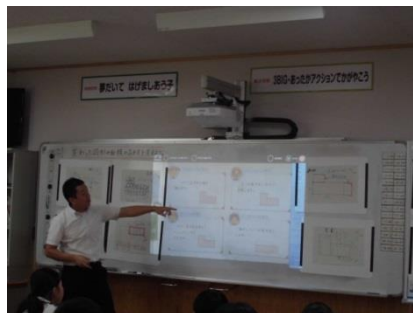
#### (2) 導入の工夫、前時と次時につながる提示の工夫

1 年生は、国語科の「海のかくれんぼ～海のかくれんぼクイズをつくろう～」において、説明文の読み取りの授業実践を行いました。まず、デジタル教科書の動画を使い、「何がかくれているでしょう。」と問いかけます。子どもたちはつぶやいたり、友達と話し合ったりするなど興味津々です。そして、正解の映像を流すと子どもたちは歓声を上げ、これから始まる授業の魅力へ引き込まれていきました。授業中盤の「つくる・高める」段階では、前時に学習した「はまぐり」の本文と、本時の「たこ」の本文を並列に提示し、書かれ方の共通点を気づきやすくすることで、となりの子と話したり、気づいたことを発表したりすることができました。ここでの学習は、次時の「もくずしよい」の学習にもつながり、その書き方を活かして海のかくれんぼクイズを作ることができました。



### (3) ICT 活用による時間短縮と子どもの思考時間の確保

4年生は、算数科の「面積」の単元において複合図形の面積の求め方についての授業実践をしました。この授業では、子どもたちの考えを教科書の考え方の例をもとに分類整理していきました。その際、ホワイトボードの中央にプロジェクターで教科書の考え方を映し出し、その周りに、子どもたちから出された考え方を対話しながら整理していきました。複合図形の求め方は様々な方法があり、子どもたちから出される考えをまとめていく際、時間がかかります。しかし、教科書の例を示しておくことで「切り方が違うだけで考え方は同じ」だということに気づきやすくなり、分類の視点がぶれることなく話し合うことができました。また、そこでの時間短縮により、本時の学びを活用した応用問題に取り組む時間も確保することができました。



## 成果

研修テーマに沿った手立てを明確にして周知することを徹底したため、事後研修では、視点がぶれることなく話し合うことができ充実した研修となりました。また、様々な教科や活用方法を取り入れた実践ができたため、ICT 活用方法の幅が広がり、教師の ICT 活用への自信も増しました。

さらに、事後研修の後、個人で振り返りや生かしたいことを「校内授業研ふり返しシート」に書き溜めたことで日々の実践につながりました。

## 課題

中心授業や事後研修を重ねていく中で、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためには、「対話をうみだす」だけでなく、「深めていく」ための対話でなくてはならないことや、そのための手段としての ICT 活用でなければならないことを感じました。また、そのような授業をつくっていくためには、事前研修を充実させる必要性も感じました。

## これからに向けて

本年度の研修を通して出てきた成果や課題を見つめ直したことで、中央小は「対話をうみだす」から「対話を通して深める」ことに研修の視点を変えていこうと考えています。これまでの実践を生かし、子どもたちの深い学びにつながるように、これからも研修に励んでいきたいです。

# 伝え合うことができる子を目指して

掛川市立曾我小学校 野代 理恵

## 人権教育の指定1年目

今年度は、曾我小が人権教育の指定を受けて1年目です。伝え合うことができるということは、相手を意識した聞き方・話し方につながります。つまり、人権意識が土台にあるというおさえて今年度の研修をスタートしました。今年度は、以下の2点を切り口に研修を進めてきました。

- 1, 子どもが解決したい課題や問いであったか。
- 2, 教師の仕掛け（授業形態 板書 教師の切り返しなど）によって子どもたちが伝え合えたか。

本校は、各研修教科は自由です。そのため、この視点が非常に重要になりました。

## 授業公開する度に、成長していく！

### 5年 道徳科 「友の肖像画」(4月)

人権教育とも結びつきの深い道徳科の授業を行いました。学習問題について前向きに話し合う姿勢が見られたものの、思いや葛藤を伝え合う場面は少なかったです。

また、事後研修の場では、人権教育としても全校で統一して取り組む視点があった方がいいのではという意見が出されました。県から出されているリーフレット「ユニバーサルデザインで みんな楽しい！みんな分かる！みんなできる！」の中から、特に授業に関することを意識していこうと取り組み始めました。

### 4年 道徳科 「心の信号機」(7月)

子どもたちが、考えなくなる学習問題でした。45分の中で子どもたちが、揺れる主人公の気持ちをよく考え、よく学んだ授業でした。ハートを視覚化し、主人公の迷いも分かりました。



### 6年 社会科 「幕府の政治と人々の暮らし」(9月)

「江戸幕府はなぜ260年も続いたのだろうか」という大きな学習課題から、本時は「なぜ鎖国をしたのだろうか」という学習問題で話合いました。



前回の4年生の研究授業をふまえ、板書のユニバーサルデザイン化を目指し、研修で「伝え合い」の「つ」を板書に貼ることにしました。大きい「つ」は全体での伝え合い、小さな「つ」はペアや少人数での話合いを意味します。「つ」を貼ることで、「ペアで意見を伝え合いましょう。」という発問が一つ減りました。集中力を切らさず話合いに入ることができます。

## 1年 道徳科 「げんきなてるくんと」

練られた学習問題、児童の実態を十分に把握した展開、計算された時間配分、授業の流れと子どもの思考が分かり、さらに文字数も少なく見やすい板書とどれをとっても分かりやすかったので、本時のねらいが達成されました。後段の時間を十分に確保することができました。



## 人権教育の視点で授業を見る！

授業を参観された指導主事から「人権教育の視点で授業を見直してください。」と御指導を受け、その後の研修では、これまで以上に人権の視点を考慮して授業を構想していくことになりました。

## 2年 国語科 「お手紙」(11月)

研修の視点に人権教育の視点を入れてみました。授業者も参観する側も初めてで戸惑いました。

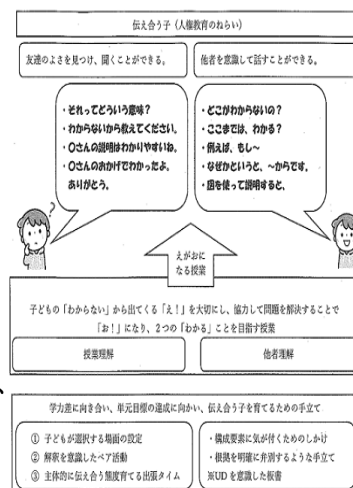
しかし、人権の視点で授業を見てみることで新たな気づきがありました。普段の授業で行っていることを少し丁寧に行うだけでも、子どもたちに優しく分かる授業になるのだと気づきました。



単元の流れが分かるように  
単元計画を貼っておきました。

## 3年 算数科 「三角形」(11月)

指導案に人権教育との関わりを入れました。人権教育と本時の授業がどう関係するのかが分かりました。『友達のよさを見つけ、聞くことができる』ためには「〇〇さんの説明はわかりやすいね。」「〇〇さんのおかげで分かったよ。ありがとう。」などの言葉があるとよいことや、『他者を意識して話すことができる』ためには、「例えば、～」「なぜかという、～からです。」などの言葉があると、本時のねらいも達しつつ、人権教育のねらいも達成できることが意識できました。



## 人権教育を意識した授業を創る

今年度は、人権教育を意識して、曾我小の教師たちは全員授業を公開し、「伝え合い」を考えました。事後研修が終わる度に、進化を重ねていく公開授業でした。「チーム曾我」で力を合わせ、指導主事の先生とともに、来年度はより、成長した子どもたちの「伝え合う姿」が見られるような授業を創っていきたいです。

# どの子ども学び続ける授業を目指して

掛川市立桜木小学校 渡邊 貴則

## はじめに

本校がめざすのは「学ぶ子」ではなく、「学んでいく子」です。その違いは主体性があるか否かにあります。変化の激しい社会にあって、重要となるのは「知識や技能」等の静的な部分ではなく、「学習力」「活用力」等の動的な部分です。

そこで本校では、「どの子ども学び続ける授業の創造」を研究主題とし、研修を進めてきました。対話で解決する学習を「協力解決学習」とし、2人組から4人組の追求学習を進め、「主体的で対話的な学び」の見られる授業づくりをめざしました。授業者が「協力解決学習」を行う場を工夫したり、全体整理の場で「見方・考え方」を掘り起こす工夫をしたりすることで、子どもたちが学び続ける「学んでいく子」になると考えました。

## 「協力解決学習」に向かう場の工夫

<3年 算数「円と球」での実践>

子どもたちが「やってみたい」「解いてみたい」と思うような課題を提示することで「協力解決学習」に主体性が生まれます。好奇心がいっぱいの3年生には、まず、画用紙を切り取った円を見せ、「この円と同じ大きさの円をかけるかな？」と問いました。子どもたちからは、「できる!」「えー!できない。」など様々な反応が返ってきました。本時の課題を「解いてみたい」と思った子どもたちは、その後の「協力解決学習」で主体的に話し合うことができました。その際のワークシートはグループに1つだけ用意しました。1つのワークシートを全員で囲むことで、自然と対話が生まれました。「協力解決学習」では、中心を見つけるために「円を2回折る」「円を1回折って直径を求め、長さを半分にする」など、子どもたちが一人では思いつかないような多様な考えを出し合うことができ、子どもたちの学びが深まっていきました。

また、「協力解決学習」中の個の学びを見取るために、理解度を三段階で表すワークシートを作りました。班全員が「そういうことか!」と納得できるまで話し合うことを目標に取り組みました。理解できた子が、まだ考えている子の質問に答えたり、説明したりすることで活発な対話が生まれていました。



## 「算数的見方・考え方」を掘り起こすための工夫

＜6年 算数「曲線のある形の面積」での実践＞

協力解決学習によって出された子どもたちの学びの中から、その時間に出会わせたい「算数的な見方・考え方」を掘り起こしていきます。子どもたちが見えていなかったことに気付き、学びをより深いものにしていきます。

本時では、「協力解決学習」で、円を平行四辺形に等積変形した図から、円の面積の公式を求めました。全体整理では、「円の面積＝半径×半径×3.14」であることの意味を理解できるように話し合いました。式の変形の段階で、半径が2つ出てきたところに、授業者がすかさず「それってどういうこと？何で半径が2つ出てきたの？」と切り返しの発問をしました。子どもたちは、ノートに考えを書いたりグループで話し合ったりするなど、「わかったつもり」になっていたことの原因を懸命に考えました。その後の発表では、算数用語を使ったり具体例を挙げたりしながら説明し、公式を覚えるだけでなく意味を理解するところまで学びが深まりました。



## 今年度を振り返って

今年度の研修を通して、子どもたちが「解いてみたい」という意欲をもって課題に取り組んだり、より深く理解しようと懸命に考えたりするなど、多くの主体的な姿を見ることができました。後期のアンケートで、「授業がよく分かる」と答えた子は93%を越えたことから校内研修の成果を感じています。また、「協力解決学習」を進めてきたことで、友達の考えを受け止めたり、友達が分かりやすいように説明したりする力が伸びてきました。この力は、相手を大切にする心情も育て、授業以外の学校生活の中でも生かされています。友達同士が認め合い助け合う場面が多く見られるようになってきました。

今後も、どの子どもも学ぶ意欲をもって主体的に学び続ける「学んでいく子」の育成をめざし、授業改善に努めていきたいと思えます。



# みんな楽しい！分かる！できる！授業づくり

## ～交流を通して高め合い、力をつける授業を目指して～

掛川市立和田岡小学校 白松 麻友子

### 積極的に授業に取り組む子

本校では、子どもたちが自ら積極的に授業に臨み、相互に関わり合う姿を目指しています。今年度は、子どもも教師も授業後の姿をイメージして望めるよう研修を進めてきました。見通しをもつことで、①授業に前向きに取り組む②自分の考えを生き生きと表現でき、学びを深めることができる③少し難しい課題にも臆することなく挑戦することができるのではないかと考えました。今年度の実践を紹介します。

### 全職員で授業づくり

#### (1) 単元計画作り

見通しをもつために必要なこと、それは単元計画です。今年度は、日々の授業の中で単元計画を作成して学習を進めていきました。1時間ごとの学習のめあて、子どもたちにつけたい力を明記し、拡大して教室に掲示しました。子どもたちからは、「今日は5時間目だよね」「今日はグループで練習する時間だね」などと、自ら学習に取り組む姿が見られました。公開授業では、全学年で実施し、充実を図りました。

時	めあて	ひょうか
⑫⑪	どうしようもないところを、手紙を書いてみよう。	どうしようもないところを、手紙で伝えることができたか。
⑩	二人が長い手紙をまわって書いたのはどうしてか考えよう。	二人がまわって書いた手紙を考えたことができたか。
⑨	音読けきをばつびょうして、かんそうを伝え合おう。	音読けきをばつびょうして、友達の発表を褒めたりして話せたことができたか。
⑧⑦	読み方のくふうを見なおして、グループでれんしゅうしよう。	友だちや先生のアドバイスを聞いて、自分の読み方をくふうしたか。
⑥	グループで、音読けきのれんしゅうしよう。	読み方を工夫して、グループで協力してれんしゅうすることができたか。
⑤	読みたいところを選び、音読けきのじゆんぶをしよう。	音読したいところを決めたか。
④③	に気をつけて読もう。	場めんごとに出てくもらう場めんごとのところや音読が分かったか。
②①	音読けきを楽しもう。	音読けきのしかたが分かったか。

◎学しゅう計かく(十二時間)

1 だれが、何を、何をするのか、どんなことを言うのかに気をつけて読もう。  
2 声とかんたんなうごきでお話をあらわそう。

◎学しゅう計かく(十二時間)  
音読けきをしよう  
お手紙 アーノルドローベル作 三木たくやく  
◎大きなめあて



#### 音楽 5 いろいろな音をたのしもう

順	めあて	きょくめい	ひょうか
1	いろいろながっきの音のちがいをききとろう。	だげつ(バード)	アからエの音の色のちがいに気づいたか。
2	リズムに合うがっきをえらんでお話ししよう。	がっきでお話し	アからエの音の色のちがいに気づいて、リズムをえらんでえんそうできたか。
3	よびかけるやくとこたえるやくになってお話ししよう。	がっきでお話し	リズムをつかいて、ペアの音だちとよびかけたがっきをえんそうできたか。
4	きよくに合ったうたい方を考えて、うたったり、リズムうちをしたりしよう。	かほちゅ	はくにのって、うたったり、リズムうちをしたりすることができたか。
5	いろいろながっきの音をかきねて、グループでれんしゅうしよう。	かほちゅ	自分のがっきと友だちのがっきの音の色のちがいに気づいて、えんそうできたか。
6	がっきの音色に気をつけて、はびょうをしよう。	かほちゅ	自分のがっきの音の色のちがいに気づいて、えんそうできたか。
7	きよくのかんじが分かるようにうたおう。	物のこえ	自分の音の色のちがいに気づいて、えんそうできたか。
8	あきの夜のかんじが分かるように、かしの音をいしきしてうたおう。	物のこえ	あきの夜のかんじが分かるように、かしの音をいしきしてうたえたか。

#### (2) 話し合い活動の充実

昨年度、授業に話し合い活動を取り入れ、朝の時間に「コミュニケーションタイム」と題して話し合いの時間を作ってきました。子どもたちは友達と話す

ことが好きになりました。今年度は、更に力をつけるために「何のための」「どういう姿が」よい話し合いなのか、ゴール地点を定めて、授業の中で設定をしました。発達段階に応じて、ペア、グループなど形態は様々ですが、思わず身を乗り出して聞いたり話したりする主体的な姿が見られました。



## 成果と課題

単元計画を作成することにより、子どもたちだけでなく、授業者が見通しをもって授業に臨むことができました。学習課題や活動内容など、つけたい力に応じて授業を組み立てることができました。12月の子どものアンケート結果では、学校が楽しい88.2%、授業が分かる88.2%、人の話をしっかり聞いている85.3%という結果になりました。教師の意図的な話し合い活動、課題の設定により、充実した授業に満足感を味わっている子どもが多いことが分かります。しかし、自分の考えを伝え合って学習しているの項目では73.5%という結果になりました。自分の考えを十分に伝えられない、聞き手に回っている子どもがいることも分かりました。

## さらなる充実のために

今後は、グループで話し合ったことをクラス全体に広めたり、学習したことを確実に定着させたりすることが重要であると考えます。どの子ども活躍できる場の設定、有効なグループの設定の仕方なども考えていかななくてはなりません。授業を通して友だちと考え、話し、自らの考えを深めた経験は、将来の生きる力につながります。今後も、職員一丸となって研修に励みたいと思います。

# 主体的にとことん学び合う子どもの育成

掛川市立原谷小学校 千葉 貴江

本年度は、研修主題「主体的にとことん学び合う子どもの育成」を目指し、研修の重点として「教師の仕掛け」と「子ども同士の関わり合いの工夫」について取り組みました。

主題に迫るために、とことん考えてみたくなるような発問の工夫、子どもたちが学習に主体的に取り組むことができるように資料の内容の精選や提示のタイミング、解決の見通しをもった話し合い活動や追究活動の方法を工夫し、各自が授業実践をしました。その上で、グループ研修においてその成果と課題の共有を図ってきました。



## 学習の基盤づくり

4月の学級開きの際に全学級で『教室はまちがうところだ（蒔田晋治著）』を担当が読み聞かせをすることから始めました。とことん学び合うための支持的な学級風土の育成を目指し、学習環境の基盤作りとして全職員で共通理解をした上での実践です。また、『伝え合いレベルアップ表』を全学級の背面黒板に掲示し、子どもたち一人一人が「聞く」「話す」の目標を各ステージ毎に定めて、実践するようにしました。これらの取組を通して、常に目標を意識することができ、すすんで発表したり友達の発表に積極的に反応したりする意欲的な姿が見られるようになりました。

## 重点 1 教師の仕掛け

学習課題との出会いの場面は、特に大切であると考えます。子どもの主体的な学びを目指し、例えば算数では児童が実際に4月から6月までに図書館で借りた本のデータを使って、資料の特徴を掴むようにしたり、理科では聴診器を使って校庭の木が吸水する音を聞かせて、その正体を考えるようにしたりするなど、子どもたちが考えてみたくなる学習課題の設定を心掛けました。

導入時には既習学習についても触れるようにし「今までと何が違うのか」「似ているところはないか」「今まで学んできたことが使えないか」など、既習事項と比べて考えることで学習課題へとつなげるようにしました。



こういった手立てを講じていくことで、子どもたちの「解決したい」「分かるようになりたい」といった学習意欲が育ってきていると感じます。

一方で、教師が掲示した資料の情報量が多すぎたために、かえって意欲の向上につながらないことがありました。また、設定した課題が難しすぎて、教師がねらう到達目標と学習者である子どもの学びにずれが生じてしまい、その差を埋めるために発問を追加したり、問い直したりと教師主導で進めてしまうといった課題も残りました。このようなことから、設定する学習課題の質や情報の量を吟味する大切さを教師が実感しました。

## 重点 2 子ども同士の関わり合いの方法

対話を取り入れた授業にも積極的に取り組んできました。その形態は、隣の友達とペアで、小グループで、学級全体で、と授業のねらいによって使い分けました。また、話合いのリーダーが固定化しないよう輪番制を取り入れたり、時には教師側が意図的にグループを設定したりすることもありました。このような取組により、子どもたちは自分の考えを伝えることに対する抵抗感が減ってきたように思います。

3年国語「ちいちゃんのかげおくり」では、2つのかげおくりをペアで協力して読み取る学習をしました。2つの場面のかげおくりを比べる際に、上段には家族みんなでかげおくりをする場面、下段にはちいちゃんが一人でかげおくりをする場面を配置し、同じ言葉と違う言葉に着目しやすくなるように、意図的に改行して自作したワークシートを準備しました。（教師の仕掛け）



ワークシートが配布されると、あるペアでは「ぼくが上の段を読むから、○さんは下の段を読んでね。」と役割分担をしてから読み始めていました。互いにアドバイスをすることで、文章を書くことが苦手な子も「～でいいよね。」と確認しながら書くことができ、自然と学び合う姿が見られました。このような素晴らしい姿が見られた時には、担任がすかさず褒め、認めていくようにしました。

ペアでの学び合いは、自分の考えを伝え合う一番身近な方法であり、どの子にも学びが保証される有効な手立てでした。自信がなかったり、考えの途中だったりする子にとっては、学びを深めることができましたと思います。

一方で、「自分の考えを伝え合う」だけに留まり、そこから「考えを深める」という点では課題が残った授業もありました。考えを深められる話合いの手本を示すことや、伝え方、関わり方のスキルの指導にも力を入れていきたいです。

また子どもたちが、必要感・切実感をもって話合いができるような学習課題。つまり、子どもが少し頑張れば届きそうで、友達と協力して考えを出し合えば解決できそうな「課題」を教師側がどうコーディネートしていくかを今後研究していきたいです。子どもの表情を的確にとらえながら、子ども一人ひとりが輝く授業を目指し、研修を進めていきたいと思っています。

# 論理的な思考力・表現力の育成

掛川市立原田小学校 池田 健

## はじめに

本校では、算数を研修の窓口とし、「主体的にとことん学び合う子」を研究主題と設定しました。「自分の考えをみんなに伝えたい」「もっと考えてみたい」「もっと友達の見聞を聞きたい」と主体的に授業に参加し、友達ととことん意見を出し合い、ぶつけ合い、学び合っていく子どもを育成していきたいと考えました。

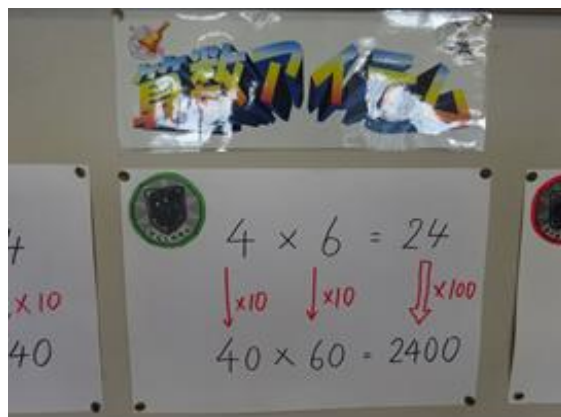
そして、そのような子どもを育成していくにあたり、論理的な思考力・表現力を付けていくことが必要であると考えました。論理的な思考力・表現力とは、子どもが既習学習をもとに、見通しをもち、筋道を立てて、図・式・言葉・操作を使い、自分の考えを作り、表現する力のことです。この論理的思考力・表現力が付いていけば、学び合いも活発になり、より主体的に、とことん学び合おうとするだろうと考えました。

## 論理的思考力・表現力を育成する柱

### ① 「算数アイテム」の活用

子どもが新しい問題に取り組む時、考えの見通しをもったり、作ったりするためには、必ず既習学習がもととなります。そこで、考えのもとになる既習学習を「算数アイテム」と名付け、この算数アイテムを使って新しい問題を解決する意識を子どもたちにつけようと考えました。

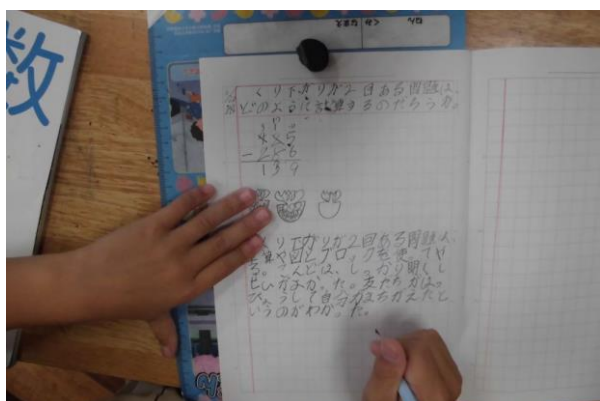
教師は、新しい単元に入る前に、単元の系統性を確認し、問題解決に必要な算数アイテムを確認しておきます。そして、教室の一角に算数コーナーを作り、算数アイテムを掲示しました。



### ② つなぎ言葉を活用した言語活動

筋道立てて自分の考えを作ったり話したりするために、「まず」「次に」「そして」「だから」といった「つなぎ言葉」を使えるようにしていく必要があると考えました。そのために、つなぎ言葉を使って書く・話すなどの言語活動を授業の中に取り入れるようにしました。

また、いつでもつなぎ言葉を意識できるように、教室に掲示したり、授業目標に取り入れたりする学年もありました。



## 評価と課題

「算数アイテム」の手立ては、論理的な思考力を育成していく上で有効でした。子どもたちが根拠を持って自分の考えを作ることができるようになりました。また、話合いでも算数アイテムを根拠として友達の考えを説明したり、反対意見を出したりする姿が見られるようになってきました。一方で、掲示する算数アイテムの量が多すぎて、わかりにくいという課題もありました。どの既習学習を、どれだけ算数アイテムとして掲示するか、精選が課題です。

「つなぎ言葉を活用した言語活動」の手立ては、計算の方法や筆算のやり方のように、順序立てて説明する時には有効でした。「まず・・・、次に・・・、つまり・・・」のつなぎ言葉を使うように指導していったことで、順序よく説明することができました。一方で、「数と計算」以外の領域で生かされにくいという課題もあります。今後は、「例えば」「もし」「だったら」のように、順序立てる言葉以外のつなぎ言葉を増やし、使えるように指導していくことで、より論理的な思考力が育成され则认为しています。

今年度の研修により、「算数アイテム」「つなぎ言葉」は、論理的な思考力・表現力を育成していくために有効な手立てであることが確認できました。来年度もこの2つの手立てをさらに研修し、論理的な思考力・表現力の育成につなげようと思います。

# 「仕掛け」「繋ぐ」を意識した校内研修

掛川市立西郷小学校 太田 愛

## 1 研修テーマの設定

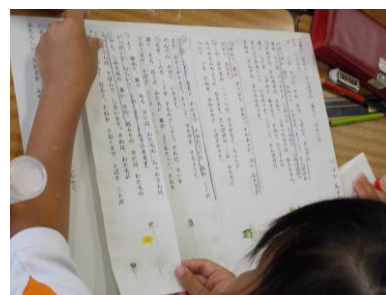
本校の子どもたちは、読み取る力が低く、自分で考えて行動することが苦手である。そこで、今年度は、研修テーマを「読む力の向上を目指した仕掛けの工夫」とした。授業の中で、読む力を付けるために教師が「仕掛け」を工夫することを実施し積み重ねた。さらに、校内研修では「繋ぐ」ことを意識することで、「仕掛け」の効果を検証していくとともに、日々の授業改善を図った。そうすることで、「自分で考え、判断し、共に学び合う子」の育成を目指した。

## 2 3つの「仕掛け」

職員間の認識によるズレを解消するため、「仕掛ける」を以下の3つに定義した。そうすることで、窓口教科の国語だけでなく、他教科にも生かせると考えた。

### ①「読みの必要性をもたせる仕掛け」

説明文では、文章カードを並べ替えることで、接続語や中心文に着目して読ませた。子どもたちも、何度も何度も本文を読み、注目すべき語や文を見つけることができた。説明文において、文章の並べ替えは有効であると感じた。



### ②「問題を焦点化し発問を工夫する仕掛け」

問題を焦点化して、子どもたちが考えやすい発問を考え投げかけた。その際、発問だけでなく、導入が子どもの思考と合っているかも大切にした。そうすることで、自分の考えがもてる子が増え、主体的に授業に取り組む姿が見られた。



### ③「効果的な交流の場を設定する仕掛け」

効果的な交流するために、どのようなペア・グループで、何を話し合わせるのかを明確にして行った。事後研修でも、付けたい力を付けるための交流になっていたか協議した。子どもたちは、自分の言葉で話し合えるようになってきた。







# 「倉真スタイル」授業の確立へ

掛川市立倉真小学校 法月 淳

## 思考力を高める学習課題の設定

本校は平成26～27年度の2年間、掛川市教育委員会指定「ICT活用研究」に取り組みました。また、平成28年度は、文部科学省委託事業「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」の実証校でした。この間、本校は研究主題を「『説明する力を身につけた子』の育成～ICT機器の効果的な活用を通して～」と設定して、研究を進めてきました。

昨年度は、ICT機器を効果的に活用して、「おさえる・しかける・たしかめる」の3つの授業展開を再構築することで、子どもたちの「説明する力」が向上するだろうという仮説を設定し、研究を進めました。「おさえる・しかける・たしかめる」授業のタイムマネジメントを全員で共有し、様々な可能性を広げることができました。一方、子どもたちの思考力の伸びが停滞しているという課題が昨年度の研究で明らかになりました。そのため、今後求められる「主体的・対話的で深い学び」を支える、思考し続ける粘り強さを引き出す研究を進める必要があるという結論に至りました。

よって本年度は、「おさえる」段階で、思考し続ける粘り強さを引き出すためには、どうしても考えたくなる、知的好奇心を引き出すような学習課題の設定に重点を置き、子どもたちの主体的な学びや、対話の場面を引き出せるような「倉真スタイル」授業の確立を目指しました。

**学習課題：「本当の友達とは、  
どんな人なのかな」**

4年生の道徳「泣いた赤鬼」での学習課題。赤鬼と青鬼のお互いを思いやっての行動を資料から読み取り「赤鬼と青鬼の行動は友達として本当に良かったのか」を話し合いました。相手のことを思いやった行動が結果的に相手のためにならなかったのだから、どうすれば良かったのか、子どもたちは悩みながら話し合いを続けました。授業前の、本当の友達は優しい子や親切な子



**ICT機器の活用は定着しました。**



**「青鬼はあれでよかったの？」**

と考えていた子どもたちが、授業後半では、相手を思うからこそ、言ってあげられることなど考えを深めていきました。思考し続ける粘り強さを引き出すことができました。

### 学習課題：「自分だったら、 どんな題名をつけるかな」

6年生の図画工作の鑑賞の授業での学習課題。まず「風神雷神図屏風」を見て、クラス全体で感じたことや予想される題名について話し合いました。学習課題のねらいを全員が把握した後に、様々な題名が発想されそうな、高松玲子の「デザートの日」という絵画作品を提示。今度は2つの小グループに分かれ、それぞれ感じたことや場面の様子などを書き込み、どんな題名をつけるかを話し合いました。「デザートの日」は子どもたちを悩ませるのに相応しい作品で、どうしても考えなくなる知的好奇心を引き出すことができました。



「どんな題名をつけるかな？」

### 学習課題：「どうしたら、みんなが 同じ絵をかけるのかな」

2年生の国語。1年生におもちゃづくりの説明書を書いて説明するという単元を貫く課題に基づき、説明書の書き方について学習する授業の学習課題。内容の曖昧な説明文で絵を描き、同じ説明で絵を描いたのに、違う絵になる経験を通して、説明文をどう直せば、みんな同じ絵が描けるようになるのか考えてみたいという、知的好奇心を引き出すことができました。



「同じ絵は描けないよねえ？」

### 「思考力が高まった」と実感するために

思考力を高める学習課題設定の次の段階は、子どもたち自身が思考力の高まりを実感することです。思考力が高まったと評価できる「視点」を明確にして、子どもに思考が高まったことを的確に伝え、実感させることが、深い学びを実現する重要なポイントになります。本校では今後、各教科で育てるべき思考力と授業者の育てたい子どもの思考力が一致しているかを診断し、思考が深まったと的確に評価できる視点を設定することで、「倉真スタイル」授業を更に高めていきます。

# 伝え合い、「問い」を解決する授業

掛川市立土方小学校 原田 昌

## はじめに

今年度の本校の研修テーマは、「伝え合い、『問い』を解決する授業」です。課題意識をもち、自ら考える「主体的に学び続ける子」の育成を目指し、思考のずれを生み出し、子どもが意欲的に考えるような学習課題づくりと、子どもの学びを深めるための意図的な交流活動の設定に取り組みました。

## 手だて

### ○1年生活科研究授業「なつとともにだちになろう」

砂場遊びを全身で楽しむ子どもの姿を目指し、「どうやって『レベルアップ』させようかな。」という学習課題を設定しました。また、子どもたち同士が交流しやすくなるよう、活動の場、物の工夫をしました。

最初は広い砂場で友達と声を掛け合って穴を掘ったり、山をつくったりしていましたが、徐々に砂場の横の「レベルアップコーナー」の木の葉やバケツ、水、カップ、枝などを使い始めました。友達の活動も気になるのか、周りを見て真似をしたり、声を掛けて一緒に遊び始めたりする子も出てきました。

教師の仕掛けによって子どもたちの活動がダイナミックになっていきました。この授業から、学習課題だけでなく、場の設定も子どもの主体的な学びにつながることに、子ども同士のかかわりを活性化させることがわかりました。



### ○各自の実践を出し合う


夏季校内研修で、7月までに行った実践を出し合いました。項目は、①子どもの問いを生み出した学習課題 ②効果的だと思ったが、実際は問いが成立しなかった学習課題 ③効果のあった交流活動 ④課題を感じた交流活動 ⑤子どもの主体的な活動につながった教師の手だて の5つです。この研修で、自分の実践を振り返るとともに、9月以降の自分の実践に取り入れられる学習課題、交流活動のヒントを得ることができました。

4月～7月 校内研修のふり取り

①子どもの問いを生み出した学習課題

○3年国工「長～い紙、つくて」…「みんなで力を合わせてくものすをつくらう」

「細長い紙の量や感触、空間の特徴などから活動を思いつく」と「自分や友達との活動のわくも一緒に気づきあおう」ことを目標にした。思考を促進するかとも思ったが、少々の糸をメーカとして細長く切ったタマの巣に編まされた虫のように自分のところを回ってみたりするなど、様々な活動をする姿が見られた。また、自分勝手な行動をする子には「力を合わせてやるんだよ」という注意をした。さらに、他の子の紙につなぎ合わせていくことに自然発生的な小集団活動を楽しんでいた。「どうすれば力を合わせて）細長い紙をくものすのようにするかな。」という問いが共有されていると感じた。



②効果的だと思ったが、実際は問いが成立しなかった学習課題

▲4年理科「天気と気温」

…「1日の気温の変わり方は天気によってちがいがあがるのだろうか。」課題を投げかけても、経験から晴れの日は暑い、雨の日は涼しくなるぐらいの話しかできなかった。子どもが1日の中で気温の変化と天気の関係に着目できず、焦点化し切れなかったと感じた。 教材研究不足を痛切に感じた。

③効果のあった交流活動

○6年理科「生き物のくらしと環境」

…「植物が空気中に酸素を出しているか」を確かめる実験方法を班で考えた。既習の内容を生かして、班で意図的に話し合いが行われた。その際、班員全員が同じ説明ができるようにしようとして投げかけた。一部の子だけの話し合いにならないように、理解の遅い子は班員を助け、説明することでより理解を深める機会とした。また、苦手な児童をつらいつらいつら子にもかわりが生まれるようにした。

④課題を感じた交流活動

▲ペア・班での話し合い

…出入りの授業の場合に、どのように組織するかが難しかった。子どもが混乱しないようにするために、学級担任の先生のやり方を踏まえつつ、どのように指導していくかは今後も大きな課題。

▲2年生での教示合い

…発達段階的に難しい部分もあった。欠点の指摘になりそうなきもあって指導した。

⑤子どもの主体的な活動につながった教師の手立

○4年理科「モーターカーをより速く走らせるには？」

…教材のキットを使ったが、最終組み立ての前までは全員一緒に行った。最終組み立ては、課題に沿って子どもたち自身が試行錯誤するように一人一人で行った。最初は班の仲間、次に同じように組み立てた子、さらに、速く走らせて方をした子というように自然発生的にかかわりが生まれる。友達の様子を見て得意な子がいた。また、「逆に向かってどうすればいいですか？」と聞いてきた子どもには、「モーターが逆に戻ってしまおうと言うことはどういうこと？」と投げかけて気づきを促すようにした。

4月～7月 校内研修のふり取り

①子どもの問いを生み出した学習課題

…なぜ、動物の音が聞こえなくなってしまうのか。

・「あむ」が分からなくなっちゃった。→ヒント、ちょうだい。

・「ア×6」が分からなくなっちゃった。→「ア×5」なら分かるんだけど。

・わり算の本を作ろう。

・きまりを考えて、？番目の形を求めよう。

・筆算を使わずに計算しよう。

・このグラフは、おもしろいか。

・九九でできないかけ算をどうやって計算すればいいか。

・たまごの観察をしよう。 ○のみたいて書いてみよう。

・植物の観察をしよう。一前の観察のときと比べよう。

・昆虫はどこにいるのだろう。→どうしてそこにいるのかな。

答えがはっきりしており、自分の考えを多くの子がわかる（書く）ことができる課題や根拠がはっきりしている課題は有効であると思う。

②効果的だと思ったが、実際は問いが成立しなかった学習課題

…「1」の音は、どのように音読すればいいだろう。

・「はく」は、動物に本当にやさしいか。

・「2.3×4」→4の段の答えに2がない、どうする？

答えが抽象的で感覚的なもの、言葉での説明が難しいものは、その後の話し合いが盛り上がり上がらないことが多かった。

③効果のあった交流活動

・4種類の植物を分担して観察し、共通点、相違点を話し合う。

・3種類のグラフを分担してつくり、比較させる。

グループで作業を分担し、それらを突き合わせて話し合い、考えをつくる（ジグソーパズル）活動は、多様な考えが出され、理解を深めるのに有効であった。

④課題を感じた交流活動

…「友達の問題を解き合う。」

…報告書を読み合う。

子ども同士で友達の問題等を見合う活動は、互いの良さを見つけることはできるのだが、それを自分に生かすところまで行かず、やりっ放しになってしまうことが多かった。

⑤子どもの主体的な活動につながった教師の手立

・デジタルカメラを班に1台配付する。

## ○学習課題分析

11月の1週間、自分の学習課題の特徴、傾向を知り、今年度の取り組みをふり返るために、全授業の学習課題とその評価、分析を行いました。主要教科だけでなく、技能教科でも効果的な課題を探ることができました。どのような課題を設定したときに子どもが主体的に追究活動を行うのかを分析したことで、活動や思考を広げるには「どのように」よりも「どうしたら」、狭めるには「なぜ」がよいなど、課題づくりのポイントが見えてきました。また、他職員の実践（課題）からも学ぶことができました。

1週間の学習課題から見えてくるとこと

	26日(月)	27日(火)	28日(水)	29日(木)	30日(金)
1 時間	国語	算数	国語	国語	(音楽)
時間目	読み聞かせの時間から「読み聞かせ」の時間	△小数のしくみをマスターしよう	○算出算の読み、書き方をあやう	△まじしから読の内容を確かめよう	
2 時間	算数	国語	書写	外国語活動	総合
時間目	△長さや面積を測るかな	△おもしろいとこはどこかな	△読み聞かせの時間	△動物の名前を調べる	△いもほりしよう
3 時間	(国工)	(社会)	算数	道徳	国語
時間目			○小数の計算のしかたを考えよう	△読者の心をよむ	△読者の心をよむ
4 時間	(国工)	国語	(社会)	算数	体育
時間目		平均速度の算数のグラフを考えよう		△100メートル走の速さを調べる	○読み聞かせを聞く読み聞かせ
5 時間	理科	体育	体育	理科	算数
時間目	(テストのための学習課題なし)	△グループで協力して実験の結果を調べる	△読者の心をよむ	△テスト直ししよう	△小数の計算の練習をしよう
6 時間	総合	総合	総合	総合	総合
時間目		△読者の心をよむ	△読者の心をよむ	△読者の心をよむ	△読者の心をよむ

上段：教科、下段：学習課題と自己評価 (◎○△×)

自己分析・考察

子どもが、何をすればいいかがはっきりしている課題は、子どもたちの活動中心の授業となり成立する。「○○しよう」という投げ掛けが多い。これは、えっ、なんで、やりたいたいと思えるような課題が少ない、手引された活動を行っていることだ。思考力、かわりを意識した課題づくりが必要。学習のまとめの糸のつながりが薄い。

## 成果と今後に向けて

今年度の児童の学校アンケートで、昨年度よりも「学校が楽しい」「授業が分かる」と答える子が増えました。学びの主体性は、テスト等の数値によって量ることはなかなかできませんが、このようなアンケート結果が出たことは、学校生活や学習に対して受動から能動に変容しつつあるのではないかと考えられます。これからも更なる「主体的に学び続ける子」を目指し、子どもたちが本気になって解決したいと思う「問い」を生み出す学習課題の工夫と、子どもの学びを深めるための意図的な交流活動の設定を続けていきたいと思えます。その上で、「土方小型の学びのプラン」として、本校の学びの形を構築していきたいと考えています。また、城東学園の一貫教育研究の研修テーマ「対話を通して考えを深める授業」とも絡め、コミュニケーション力を育てる具体的な手だてを学園4校の足並みを揃え、実践していきます。

# 対話を通してまなんでいく授業

掛川市立佐東小学校 竹内 洋介

## P 本音で関わり、課題を解決するために

<H 29 の校内研修の総括>

○「導入の工夫」と「問いの焦点化」をすることで、児童が課題に対して主体的に取り組むようになった。

▲基礎的な土台（基礎の定着・聴く力・伝える力）が不十分で、学びが広がったり深まったりしなかった。

<目指す授業像>

安心して何でも言い合える学級経営、本音で語る道徳科を基盤とし、さらに校内研修で、対話を通して課題を解決する授業。

<目指す子ども像>

主体的に、本音で関わり、力の限り「まなんでいく子」

## D 対話を生み出す交流活動の工夫

<初期にうった手立て>

- ① 座席の隊形をはコの字型を基本。
- ② 学習班の人数を3～4人。
- ③ 『まなボード』を使用。
- ④ 思考を助ける掲示物。

○座席の形態をコの字型に統一したことで、児童が発言をする際に、教師に話すのではなく、学級全員に話すことができるようになってきた。

○学習班の人数を3～4人として、発言できる時間を十分に確保できた。

○対話ツールとして班に1つ『まなボード』を用意し、考えをまとめるために使用した。これによって、児童は、課題に対して1人ではなく仲間と関わり合いながら考えることが当たり前になった。

▲自分の意見を仲間に伝えはするが、それをもとに、どのように考えを深めていけばよいのか、対話の仕方が分かっていたいなかった。



＜後期にうった手立て＞

- ① 発問の工夫（授業設計アイデアシート・振り返りシートの使用）
- ② 関わって解決したいという思いを高めるための、教材・教具
- ③ ICTの活用

- 対話する必然性がある発問（考えが複数ある等）の工夫をすることで、考えは1つではなくよりよい考えを関わり合いながら見つけようとする児童が増えた。
- 言葉で説明しただけでは理解しづらい課題に対して、理解を助ける教材・教具を使用することで、「分かった!」「できた!」が増えた。
- ICTを使用することで、視覚的に理解を助けた。また、比較したり分類したりすることが容易で、対話することに時間を割くことができた。



## C 成果と課題

- 座席の隊形、班の人数やメンバー構成、思考を助ける掲示物など、対話するための環境の工夫はもちろん、『まなボード』やタブレットPC等、考えをまとめるためのツールを使ったことで、児童が関わって学んでいく土台ができた。
- 発問を工夫することによって、児童が対話をする必要性が出たり、考えを広めたり深めたりすることができた。
- ▲単元計画や授業構想。（どの教科のどの単元のどこで対話を取り入れるか?）
- ▲対話の仕方（発表会で終わらない）を研究し、手立てを見出したい。
- ▲授業中に児童を見取り、どう生かすのか、どう支援するのか。

## A 来年度に向けて

来年度は以下の3つの視点が研修を進める上で重点になると考えている。

- ① 対話する意欲を引き出すための単元計画や発問の工夫。（授業構想）
- ② 対話を深めるための指導技術（手立て）の向上。（対話の仕方）
- ③ 児童を見取る力の向上。（支援・評価）

また、来年度は城東学園の小中一貫教育研究の本発表があるため、研修テーマを「対話を通して考えを深める授業」と統一した。小中一貫教育研究の視点でも、成果と課題を見出し、掛川市のモデルとなっていきたい。

## コミュニケーション力の育成

# ～子どもの中に問いや目標が生まれる授業を目指して～

掛川市立中小学校 増田 七奈子

### 窓口教科が3つ!?

今年度の本校の窓口教科は、外国語活動、生活科・総合的な学習の時間、道徳科の3教科だった。3教科も窓口教科として研修することは可能なのか、本年度の研修はどうなるのか…4月にそう感じていたのは、私だけではないだろう。

しかし、研修テーマ「コミュニケーション力の育成～子どもの中に問いや目標が生まれる授業を目指して～」に沿って3教科を研修し、共通実践することを明確にし、中小全体で成果を上げることができた。それは、3つくり部の重点活動が授業であり、各学級において日常的に『「いい授業」づくり』を実践研究したことと、城東中学校区小中一貫教育研究計画に沿って研修を進めてきたことで、研修を要にして教育活動全体で『自分から学ぶ子 人から学ぶ子』を目指すことができたからであろう。

### チーム中小！本年度の研修の歩み

#### 1 生活科・総合的な学習の時間：1年間を見通した指導計画を

- (1) 4月から6月に各学年のテーマやねらいについて全体で意見交換したり、他学年と比較・検討したりすることを繰り返し、各学年の年間計画を作成した。
- (2) 7月に地域支援課による学校等支援研修で、子どもの中に問いや目標が生まれるための「課題設定」「指導計画」「地域との連携方法」について研修した。

#### 【共通実践してきたこと】

- ①子どもの実態（これまでの学び・今どのように考えているのか）を踏まえて課題を設定する。
- ②子どもが「なぜかな。」「本当にそうかな。」という「問い=ずれ」をもつ課題を設定する。



亀惣川は今の方が汚いと思っていたら、昔よりきれいになったと聞いたよ。本当かな。調べてみよう。

#### 2 道徳科：発問の工夫に焦点化して

- (1) 夏の研修で、子どもの中に問いや目標が生まれるために、自分のこととして考えるための発問を全体研修で話し合った。
- (2) 9月から10月に、道徳的心情とコミュニケーション力を育成するための発問の工夫を視点とした授業研究を、5年、2年、たんぽぽ組で行った。

#### 【共通実践してきたこと】

- ①導入で、本時に考える道徳的価値についての構えをつくる。
- ②行動について問うのではなく、心情を問う発問をする。

③展開前段で、子どもの考えを教師が問い返してまとめていき、本時のキーワードを明確にする。

④後段で「自分だったらどう？」と考えさせるだけでなく、前段の登場人物の心情を考えさせる時に、自分の生活経験をもとに話をさせる。



私もね、けがをしたら痛くて辛かったよ。だからこの子も…

### 3 外国語活動：コミュニケーションの素地を育成するために

(1) 夏の研修で、グループに分かれて単元計画を作成し、模擬授業形式で発表した。

(2) 11月に、コミュニケーションの素地を育成するための活動の工夫に焦点を絞った授業研究を、1年、3年、4年、6年で行った。

#### 【共通実践してきたこと】

①導入で単元（本時）の目標を明確にもたせる。

②めあてに向かう子どもの表れをその都度価値づけたり、活動の中間評価を行ったりして、意欲を喚起する。



授業研究後、すぐに事後のまとめの研修便りを作成したり、授業者がまとめのレポートを作成したりし、成果と課題を明らかにすることで、次の授業研究に生かした。

また、具体的な発問と子どもの表れを例示することで、どの学級でも実践できるようにした。

(1) 活動のめあてに焦点を当てた発問をする。また問い返して本時のキーワードを明確にする。

①導入で今日は考える道徳的課題についての考えをつくる。(発達段階に応じて)  
発問「何かにしたいけどいいことができないことってある？」  
子「あんなに泣きたかったけど、泣き止むのが自分だけできないときがあるな」  
→導入で「今日はいいことをしたいけどいいことができない時の気持ちを考えるんだな」とわかれば、1時間教師も子どもも焦点がぼやけない。

②展開前段で、子どもの考えを教師がまとめるための振り返り発問をする。  
発問「ぜひ注意したい気持ちになるの？」  
子「ここでは遊んじゃダメだから」 子「知らないから」 子「けがをしたらかわいそうだから」  
→「遊びにルールが書いてある」 → 子「大きくなればわかるかも」 → 子「だって自分がけがをしたら痛いからこの子だって…」  
↓ ↓ ↓  
「あまり守ることを大切にしているから、強っても泣きたかった気持ちになるんだね」とまとめる。

研修だよりの一部

## 日常的に『「いい授業」づくり』を

私自身、今年度ほど「PDCAサイクル」を意識した年はなかった。事前研修、授業研究、事後研修を行ったらそれで終わりではなく、その研修の成果と課題を受け、全学級で共通実践することをその都度明らかにしてきた。そしてそれを、3つくり部のステージ評価と関連付けながら、実践を振り返り、次の手立てへとつなげてきた。今取り組んでいることは、これまでの研修や今後の研修にどうつながるのかを常に考え、一つ一つの研修を積み重ねていくことで、全教員が3教科において日常的に『「いい授業」づくり』を実践しようと努めることができた。

しかし、授業は、毎日、毎時間、教師と子どもがつくり上げるものである。当然、研究授業や参観授業、研修の教科だけ「いい授業」をすればいいわけではない。いかに、系統的かつ他教科との横断的なつながりをもって研修していくかが課題である。今後も日常的に『「いい授業」づくり』を目指していきたい。



# 心の鐘を響かせよう！

掛川市立大坂小学校 椎原 佳隆

## 心の鐘

本校では「心の鐘」の音がたびたび響く。気持ちのいい挨拶ができた子がいると昼の放送で紹介し、心の鐘広場に設置された心の鐘を数回鳴らす。子どもたちは、手を上げて、指で鐘の音の回数を示す。鳴り終わると「今日は、○回だった！」と大きな声で喜び合う。ステージの終わりに頑張りを称えて、運動会の頑張りを見つけてなど、子どもたちのよい所を見つける度に、校内に鐘の音が本当に響き渡る。

研修でも是非「心の鐘」を響かせたい。「共に学び合い、わかった！できた！を実感する子」を研修主題に、子どもたちの心の中の鐘を響かせるべく、職員で切磋琢磨し1年間取り組んできた。



## 心の鐘を響かせるために

4月、全職員で研修主題「共に学び合い、わかった！できた！を実感する子」を達成するためには、どのような取組を行っていけばよいかを何回か話し合った。特に、仮説にある手立て②「心を揺さぶる問い」について共通理解を深め、本年度の研修の柱となることを確認した。

本年度年間20回行った授業研究以外にも、職員研修として外部講師をお招きして、4月「外国語研修」、6月「道徳科研修」、夏季休業中「図画工作科実技研修」「音楽科実技研修」、10月「メンタルヘルス研修」も教職員としてのスキルアップの為に行った。

## 鐘の音が響くとき

子どもから出た言葉を使った学習問題「心を揺さぶる問い」（2年生の実践）

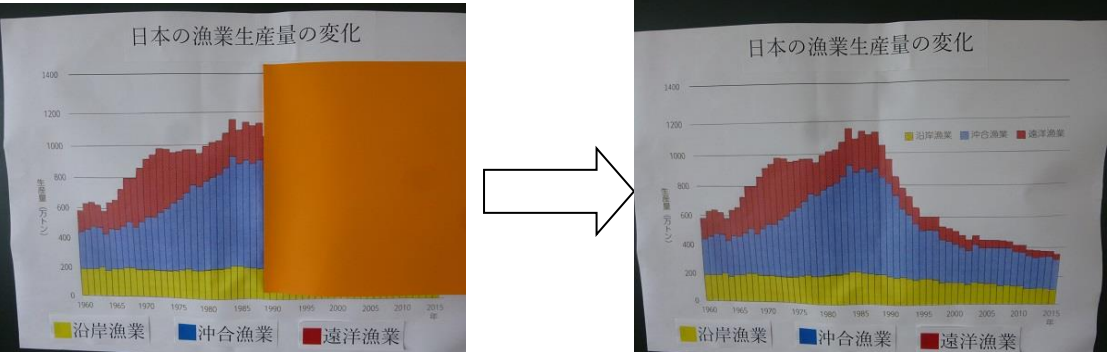
学習問題との出会い方で、1時間の授業は大きく変わる。自分たちの問い（疑問）から生まれた学習問題なら、是非とも解決したいはずだ。「わかった！できた！」と心の鐘が響いた瞬間だ。



「どちらが本当の分数って  
いえるのか？」の学習問題  
で、1時間考えました。

資料の提示の工夫で「なぜ？」を生み出し、「解決したい！」へとつなげる  
(5年生の実践)

社会科では、「資料を読み取る力」を身に付けることが大切だ。インパクトのある大きく変化する2つの資料を提示し、子どもたちの心を揺さぶる。子どもたちの「なぜ？」や「え、普通とちがう！」という気持ちを引き出すことが心の鐘を響かせる第一歩となった。



日本の漁業生産量の変化

漁業生産量の急激な落差を印象づけて→学習問題  
「漁業生産量が減っているのはなぜだろう。」

個に合わせた教材、掲示物の準備（特別支援学級の実践）

ユニバーサルデザインの授業、一人一人の実態に合わせた授業により、子どもた



ちの授業に対する意欲はぐんと増す。特別支援学級での指導を他の学級でも生かしたい。そんな気持ちで行った特別支援学級の授業研究。

「自分たちで作った野菜を使い夏カレーを作る」魅力的な教材。しかも、一人一人の実態に合わせた取り組みやすいワークシート。子どもたちの瞳が輝いた瞬間だった。

さらなる鐘の音を

1年を通して目的を持ち研修に取り組んだことにより、教師のスキルは確実にアップした。子どもたちも落ち着いて前向きに授業に取り組んでいる。学校評価でも「授業の内容がよくわかる」の項目は高評価だ。

研究授業の事後研で「とりあえず、まとめまでいけてよかった」という反省が何回か聞かれた。計画した授業を最後まで進めることよりも、目の前の子どもの様子をしっかりと見取り、子どもたちの心に響く授業を作っていきたい。そんな構えで来年度の校内研修に取り組むことが「さらなる鐘の音を響かせる」ことにつながっていくと考える。

# 「主体的に学び合う子」を目指して

掛川市立千浜小学校 山下 陽子

## 1 はじめに

本校では、今年度の研修の目指す姿として、

- ・学びのあしあと（何をどのように学んできたか）を生かして、主体的に学び、学びの実感をもつ子
- ・困っていることや分かったことを自分の言葉で伝え、よりよい課題解決に向けて学び合う子

を設定した。

児童は、明るく素直でまじめに学習に取り組んでいる。しかし、児童自身が成長を実感しているかという点、満足しているとは言えない。昨年度は、自分で活動したり話したりする授業の方が学力が高まるという考えから、教師が授業の中に交流の場を意図的に設定してきた。

本年度はさらに、児童自身に学びの実感がもて主体的に学べるよう、算数科を窓口として、児童自身から「交流したい」という必要感のある問題設定を中心に取り組んできた。

## 2 実践

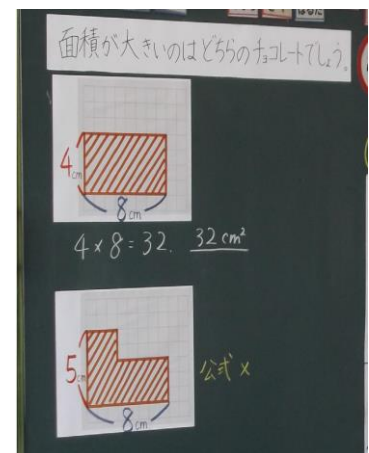
### (1) 導入の工夫

導入にパワーポイントを用いて、既習内容の確認や本時の課題を提示した。特に図形の学習では、既習事項が一目で分かり、短時間で確認することができた。



### (2) 必要感のある学習問題の設定

4年「広さを調べよう」の授業では、チョコレートの大きさを比べるという課題を設定した。長方形とL字型の物を提示することで、「長方形は公式を使えば求められる。」「食べた方は横が足りないからかけ算の公式が使えない…」と、本時の問題を理解することにつながった。前時までの公式だけでは解けないという困り感を共有することで、どうすれば解けるのかという意欲に結びつけることができた。



### (3) 関わりを通して考えを深めた授業展開

学習問題を確認した後、必ず一人学びの時間を設定した。最初は、なかなか自分の考えを書くことができなかつた子も、一つは自分の考えを書くことができるようになった。一人学びで自分の考えをつくることで、友だちの発表を聞く際、比較しながら聞くことができる子が増えた。そして、つけたし・お助け・質問発表で意見がつながり、子どもたち同士の横のつながりで学びを深めることができた。複数の考えを比較し、**㊦****㊧****㊨**の考えはどれかを考えたり、友だちの考え方の説明の仕方を考えたりして、答えの根拠を導き出すことができたことで、学びの実感につながった。

考えを伝え合う場面では、ホワイトボードを活用して意見の伝え合いを行った。子どもたち同士で自分たちの意見をホワイトボードにまとめ（主に小グループ）、自分たちの言葉で伝えたり、説明したりするようにした。全体の話し合いでは活躍できない子でも、意欲的に伝え合いの活動に参加できた。



## 3 成果と課題

必要感のある学習問題の設定に取り組んだことで、児童の学ぶ意欲が高まった。自分の考えを作ったあと、友達はどう考えているのか知るために「交流したい」という思いも強くなった。ペアでの交流、小グループでの交流、学級全体での交流など、発達段階や学習内容に応じて臨機応変に交流の場をもったこともあり、児童は主体的に交流し学びの実感をもつことができた。

一方、自分の考えを自分の言葉でうまく伝えられず、途中であきらめてしまう姿もあり、「伝える力・表現する力」をつけることが課題となっている。

## 4 来年度に向けて

児童に表現力をつけるためいろいろな取り組みをしているが、まだ弱い部分である。本年度高まってきた「交流したい」という意欲を活用して表現力を高めるための手を打っていきたい。



## 主体的・対話的で深い学びの実現

### —進んでコミュニケーションを図ろうとする子を目指して—

掛川市立横須賀小学校 鈴木 将吾

#### 子どもが「やってみたい」「聞いてみたい」と思えるような交流活動

外国語活動で、子どもが必要感をもって友達と関わることは、コミュニケーションを深めるために重要である。そのために単元のゴールとする魅力ある交流活動を設定し子どもと共有するようにした。ペアになった友達がどんな食べ物を好きか予想し、そのペアのために食事のメニューを集める活動では、4時間の単元の最初に4時間目にペアのためのスペシャルメニューを作ってプレゼントしよう子どもたちになげかけた。食事のメニューのシールをお店の人とお客さんになって渡したりもらったりする活動をすることで、子どもの意欲を引き出すことができた。いかに「相手のために集めてプレゼントしよう。」という意欲を生み出せるかが単元構想のカギとなり、考えさせる材料の工夫につながることが確認された。



#### 子ども一人一人に合わせた支援

特別支援学級での授業公開を通して、人数が少ない分、一人一人の子どもに対して、教師がどのように動き、支援していくかということ問い直す研究につながった。様々な実態をもつ子どもに寄り添った指導を行うために、ホワイトボードを活用し、一人一人の今日の課題や進捗状況を見える化した。子どもにとっても自分のやるべきことが明確になり、教師にとっても、それぞれの進度に合わせて支援を行えるため、有効な手立てとなった。一人一人の子どもが自分の学習に集中して取り組むために、衝立を使ってスペースを区切り、学習を進めた。実態を把握し、一人一人に学習の見通しを持たせることで、子どもたちは自分から学習に取り組めるということが確認できた。



## 関わりを広げたり深めたりする交流活動

6年生の外国語活動では、「将来の夢を伝え合おう」という活動を行った。それぞれの子どもが自分の夢を記した「ドリームカード」を作成し、それを見せながら伝え合うことで、より「あの人にも聞いてみよう」「もっとたくさんの人に聞いてみたい」と思えるような活動につながった。また、授業の終わりには、クラスの全員が作成したドリームカードを1枚の紙に掲示することで、一人一人が夢を持っていることや、クラス全員が夢に向かってがんばっていることを実感することができた。授業の中で教師が多くの人に関わったり、男女関係なく関わったりすることのできている子どもを価値づけることで、子どもの気持ちを高めることができた。交流活動の中間の評価として、より心地よいやりとりをする姿を教師が見つけ、声をかけていた。こうした教師の見取りによって、その交流活動で関わりが広がったり深まったり子どもの様子に変容が見られた。



## スムーズな交流活動に向けた効果的な言い慣れ活動

4年生の公開授業では、交流活動にスムーズに入っていくための言い慣れ活動について注目して授業を行った。子どもの実態として、言い慣れていないため、友達とうまく関われないという課題があった。そこで、活動で使用する言語材料について、たくさん聞いたり言ったりできる機会を設定した。また、ペアになって尋ねたり答えたりする活動を行った。尋ねる表現や答える表現を吟味し簡単にすることで、たくさん言い慣れることができた。困った時には先生に「What's this?」と聞くなど、安心して活動ができるような支援をした。このような安心感も、子どもたちがスムーズに交流活動に取り組むために重要だとわかった。



〈成果と課題〉対話や交流の工夫によって深い学びをつくるためのコミュニケーション力が育ちつつあることを感じる。来年度は更に、子ども同士の学び合う力の育成に力を入れたい。

# 「自分の考えをもち 学び合う子を育てる授業」を目指して

掛川市立大淵小学校 石田 智子

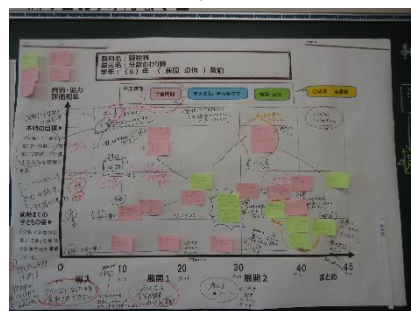
## はじめに

学校教育目標「かがやく大松の子」、重点目標「みがこう自分を 高め合おうみんなで」を受け、今年度の研修テーマを「自分の考えをもち 学び合う子を育てる授業」としてスタートしました。前年度までに「聴くことの向上」と「少人数での伝え合い」に成果がみられ、次のステップとして「児童相互に考えを出し合い、学び合う授業づくり」を目指し、「学びの継続を生み出す単元構想」「追求したくなる発問」「学びを深める相談・交流」の3つの柱で研修を進めてきました。

## 子どもが主体的に学ぶための「発問」と「相談・交流」

本校は、全8学級が細案を作成し研究授業を行います。教科は授業者が選択しますが、研修の成果と課題につながりをもたせながら授業案作りをしてきました。

事前研の模擬授業では、子どもの思考の流れを意識して授業案を検討します。事後研では、教師の発問や学習活動に対する抽出見の表れを右図のようなワークシートに書き込みながら変容を視覚的に明らかにし、教師の指導が適切であったか協議します。そして、成果と課題を次の研修へつなぎました。



まず、重点的に検討したことは「追求したくなる発問」です。「本時の目標 (つきたい力) → 学習問題⑩ (中心発問) → 青枠⑩ (本時のまとめ)」が貫かれていることは、子どもたちの確かな学びの保証につながります。中でも「子どもが追求したくなる学習問題⑩」にするために、「何について、どんな追求をさせるか」を考えながら言葉を吟味しました。第5回研究授業(4年国語)の事前研では、本時だけ他の時間と問題が異質であるのではないかと協議し、前後の時間と同じような学習問題に変更して臨みました。その結果、本時で何をどのように学習すればよいのかを全員が理解し、学びの土台に乗せることができました。そして、時間を追うごとに少しずつ深く思考できるようになったのです。

次に、重点的に検討したことは、「学びを深める相談・交流」のあり方についてです。

29年度の相談・交流と違う点は、「相手に自分の考えを伝える」だけでなく、「自分の考えとの相違点を探しながら相談・交流し、そこで得た情報を統合・取捨・選択して全体での練り合いにつなぐ手立てとして行う」という点です。第1回研究授業(3年国語)では、学習問題に対する自分の考えをつかった後、ペアや班での相談・交流の場を設けることによって全員が考えを伝える姿が見られました。自分の考えを伝えられない子にとっては有効でしたが、「本時のねらいを達成させるため、展開後半に深める発問と視点をはっきりさせた相談・交流の時間を多くとりたい。」という次への課題が上がりました。それを受け、第2回研究授業(6年算数)では、学習問題に対する個人学習の後、同じ考えをもつグループで話し合う活動を取り入れたこ



とにより活発に意見を交流して学びを深める姿が見られました。つながりをもたせた「相談・交流」の実践は次の通りです。

第3回1組	4人の子どもたちの <u>学びを深める効果的な相談・交流と場の設定</u>
第4回2組	学習問題を <u>自力解決させるための効果的な支援</u> （教師との相談・交流）
第5回4年	学習問題を解決するための <u>個人学習の効果的な支援や相談・交流のあり方</u>
第6回1年	子どもたちに交流する視点を <u>はっきり示して</u> 、学習問題の追求を深める相談・交流のあり方
第7回5年 第8回2年	<u>高学年・低学年の子どもたちに交流する視点をはっきり示して</u> 、学習問題の追求を深める相談・交流のあり方

授業者を中心にして、前回の課題を受けて手立てを考えました。追求課題別やジグソー的な交流など授業形態の工夫によって、自分から友達に関わる子ども、小グループで活発に話し合っただけで考えを深める子どもの姿も見られるようになってきています。

## 授業力の向上が、子どもの学びの深まりを生む

1年間の研修を通しての成果は、大きく3つあります。

1つ目は、問題解決のために教科書の文に線を引いたり、ノートに言葉や図等を使ったりして、自力で自分の考えをつくることのできる子が増えてきたことです。

2つ目は、全職員で、学年や教科を問わず「学習問題」を吟味することを通して、本時でつきたい力を明確にもち、それを達成させるための「学習問題」が授業の要であることの意識が高まりました。また、検討中にいろいろなパターンの学習問題が出たことで追求のさせ方の幅を広げることができました。

3つ目は、子どもたちに「相談・交流」の仕方が一層身に付いたことです。さらに、子どもの学びを活性化させる手立ても見えてきました。視点を与えることによって交流の意図がはっきりし、聞き方の向上につながっていったのです。

一方、課題として明らかになってきたこともあります。

1つ目は、学習問題と相談・交流については検討することができましたが、単元構想まで十分検討する時間が取れなかったことです。

2つ目は、教師の発問を一層吟味していくことです。教科の資質・能力にせまることのできるよう教材研究を行い、発問の言葉を検討していく必要があります。

3つ目は、相談・交流のねらいをはっきりさせるとともに学年のおさえ（系統）を共通理解していくことです。つきたい力に迫るための教師の意図的支援や、交流中の子どもたちを見取って授業を組み立てていく教師の力をつけていくことも重要です。

## 継続と挑戦

長期的な指導によって子どもたちの学ぶ姿は変容し、「聴ける子」「自分の思いや考えを言える子」が増えてきています。今年度の研修では、子どもたちの中に相談・交流で意見を交わし合うことがさらに定着したと言えます。しかし、まだ「学び合う子」に近づいたとは言えません。今後は、今できていることを維持するために、子どもへの価値づけと指導の工夫を続けながら、課題解決に向けて研修を進めていきたいと思ひます。

「みがこう自分を 高め合おうみんな」の具体的な学びの姿を全職員で共有しながら、子どもの表れを軸にした協議を行い、授業力を磨いていく教職員でありたいと思ひます。



# 主体的に学び合う生徒

掛川市立栄川中学校 細井 道浩

## 学び合う生徒とは・・・？

今年度の目指す生徒の姿は、

- ① 考えを比べながら聴き、伝え合う姿
- ② 仲間と協力して、課題を解決する姿
- ③ 自分の思いや考えをわかりやすく表現する姿

である。特に、今年度は、生徒の主体性を育むために「考えを比べながら聴き、伝え合う姿」を重点目標として授業実践に取り組んだ。

## 生徒一人ひとりの学びの充実

生徒が主体的に学ぶためには、教師の「仕掛け」が非常に重要である。そのため、本校では、以下の5つのことを意識して研修を進めた。

- ① 各教科の本質に迫るために、新学習指導要領に基づく授業づくり
- ② 具体的な生徒の姿をイメージした単元構想による1時間毎の授業展開
- ③ 生徒に学びの実感をもたせるための教師の揺さぶり（支援）の研修
- ④ 生徒の学びの価値付け（評価）
- ⑤ 自ら学び続ける教師であることと、その姿を常に生徒に示すこと。

これらを研修の柱として、生徒一人ひとりが主体的な学び・対話的な学び・深い学びを実践するために、授業改善に努めている。

### ① 生徒個人に目を向けた単元構想の計画

全校生徒94人という小規模な学校であるため、生徒一人ひとりに目を向けた指導の充実を図るために、単元ごとに生徒一人ひとりの単元開始前の姿と単元終了後の姿を明確にイメージしながら単元構想を計画した。

#### 【国語科の例】

生徒	単元開始前の学習課題に対する姿	単元終了後の学習課題に対する姿
Aさん	一部分の内容にとらわれて、文章全体として、説明の順序や図、小見出し、語句の使い方の効果に着目して、読むことができない。	一部分の内容だけにとらわれるのではなく、文章全体として、説明の順序や図、小見出し、語句の使い方の効果に着目して、読むことができるようになる。

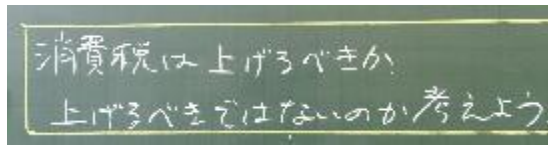
### ② 学びのUDの視点に立った支援

本校は、学びのUDの視点に立った支援を効果的に行うことによって、すべての生徒を学びのステージに立たせることができると考えている。そこで、【焦点化】【視覚化】【共有化】の3点について、具体的にどのようなことなのかを職員が共通理解した上で、授業に取り組んだ。

【焦点化】 生徒が「今日は、何を学習するのか」「何を考えるのか」などを理解して1時間の授業に見通しをもって参加できるような課題を設定したり、発問を工夫したりする支援。

(社会科)

〈学習問題を工夫する焦点化の場面〉



学習問題を工夫することにより、生徒が1時間の授業で何を考えればよいのかが明確化されている。

【視覚化】 生徒の思考を助けるために、板書を構造化したり、教材教具を工夫したりして、学習していることをわかりやすく表す支援。

(数学科)

長方形の紙を3等分するために、タブレットを用いて動画を視聴し、課題解決へのヒントを得ている。

〈教具の工夫による視覚化の場面〉



【共有化】 生徒個々の意見を小集団や全体で共有するために、意図的に授業形態を工夫する支援。

(英語科)

〈小集団での共有化の場面〉



学習内容を身につけるために、生徒が個々で考えたことを班活動を通して共有している。さらに、教師から新たな視点を与えられ、考えを広げている。

## 成果と課題

- 各授業で、生徒が身を乗り出し、活発に対話する姿が見られた。
- 円滑な人間関係の中、生徒が安心して意見を出し合い、深い学びに向かおうとする意欲が感じられた。
- ▲ 現状は「全員参加」を目的とした「学び合い」になっているため、次は「全員理解」を目指した授業への転換が必要である。
- ▲ 個人でじっくり考えを形成し、他者との関わりの中で、考えを広げたり深めたりできる授業を展開しなければならない。

## 今後の研修

本校が考える「学び合い」とは、自分の考えをきちんともった上でその考えを他者と突き合わせ議論することにより、新たなものの見方や考え方を得ることができるとする授業形態のことである。今年度は「全員参加」を目指した「学び合い」を進めてきたが、今後は、個人の力を着実に伸ばしていくために「全員理解」を目指し、教科の本質を追究していく授業が求められる。この目標を達成させるために、来年度もさらに研修を積み、生徒の学力向上につながる授業改善に邁進していきたい。

# 「学び合い」を支える信頼づくりと研修方法の工夫

掛川市立東中学校 杉山 晃弘

## 1 本校生徒の目指す姿

東中は「学び合い」を重点目標とし、グローバル社会を生き抜くために、他と関わりながらよりよく問題を解決していく能力の育成を目指している。東中生の学びに向かう姿はすばらしく、問いに対して自分なりの考えをもち、仲間と関わり合うことで、その考えをより豊かに磨き上げている。しかし、SNS等の普及に伴い、コミュニケーションが多様化し、その結果、面と向かった音声コミュニケーションの経験が不足したり、自己の表現に対する責任が希薄化したりしている実態もある。相手の立場を尊重する態度を養い、さらなる他者との信頼づくりに努めたい。また、子どもも持っているものをさらに引き出し、より主体的で、深い学びにつなげられるような取組をしていきたいと考えた。

## 2 今年度の取組

### (1) コミュニケーション活動の実施

本年度から受容的に聞くスキルトレーニングとして「コミュニケーション活動」を毎週木曜日の朝に全学級で行うことにした。この活動は、隣同士のペアで、1つの話題について話したり聞いたりする活動である。まず、話し手が1分間で話題について話す。聞き手は傾聴したのち、1分以内で聞き取った内容をそのまま話し手に返したり、感想を付け加えたり、話の内容に質問し、コミュニケーションを深めたりする。話す素材については、1学期は、「過去の体験から語ることができる内容」、2学期は「生徒にとって未体験のことについてイメージを語る内容」、3学期は「問題解決的な内容」とした。(附属島田中、大須賀中での実践を参考にしている。)

### (2) 研修方法の工夫(生徒が追究したいと思えるような課題や問いの設定)

校内研修の中心授業案を事前に検討する過程で、「授業設計アイデアシート」を活用し、授業づくりにおける条件を①「解決したい課題や問い」の設定、②「考えるための材料」の提示、③「対話と思考」の充実、④「学習の成果」が実感できる振り返りとして、授業設計の視点とした。また、中心授業参観においては、生徒1人に教員が1人ついて付箋に授業記録をとり、事後検討会では、県総合教育センターのサポートブックワークシート(第9章使えるシート集『主体的・対話的で深い学び』)の視点からの授業改善)を用いて、その付箋を貼りながら、生徒のあらわれや変容の原因を分析した。

## 3 取組に対する成果と課題

### (1) コミュニケーション活動の成果と課題

2学期末に、生徒に対してアンケートを行った結果、「コミュニケーション活動を行うことで、相手の話を受容的に聞くことができるようになったか」という質問に対して、もともと聞くことが得意な生徒は、85%が「できるようになった」(とても・まあまあ)と回答し、15%が「できるようにならなかった」(あまり・まったく)と回答した。この「できるようにならなかった」の主な理由は、「もともと受容的に聞くことができたから」である。聞くことが苦手な生徒については、67%が「できるようにならなかった」と回答し、33%が「できるようにならなかった」と回答した。この「できるようにならなかった」の主な理由は、「自分自身が聞くことを意識していなかった」「相手の話に関心がもてなかつた」



「すぐ反論してしまった」などである。また、全体の82%が、「受容的に聞くことで、考えが広がったり、深まったりすることを実感できた」と回答した。聞き手が、受容的に聞くことで、話し手に「安心感」や「満足感」、さらには、「もっと話したい」という「意欲」を与える。こうしたスキルは、他者との信頼関係を築くうえで必要不可欠なものであると考える。

加えて、生徒らは「コミュニケーション活動」の効果について次のように答えている。

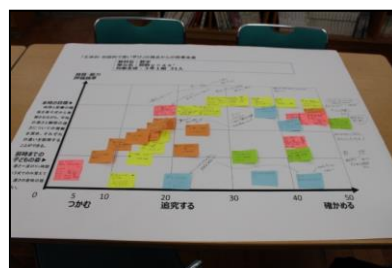
#### 《生徒の回答》

- ・人と話すことが得意になった。 ・人と話すことがおもしろくなった。
- ・話題を見つけて自分から話せるようになった。
- ・あまり話したことがない人とでも会話ができるようになった。
- ・沈黙が少なくなり、話しやすくなった。
- ・まわりに明るく振る舞えるようになった。
- ・相手のことやいろいろな考え方を知ることができるようになった。
- ・簡潔にまとめてから話せるようになった。
- ・文の組み立てができ、わかりやすく伝えられるようになった。
- ・他者の意見と照らし合わせて考え、関連させて話せるようになった。
- ・相手の意見を「それもあるよね」と認められるようになった。
- ・相手の話をうなずいて聞けるようになった。
- ・最後まで相手の話を聞けるようになった。
- ・相手の話に反応しやすくなった。 ・相手の考えを引き出せるようになった。

このような結果から、本年度取り組んでいる「コミュニケーション活動」は、大変有意義な活動であることがわかる。話し手は、聞き手が受容的な姿勢を見せることで、「伝わった」「わかってもらえた」あるいは「認めてもらえた」という実感をもつことができる。このような経験を重ねることで、自己肯定感が生まれ、「自分に対する信頼」を高めることにもつながると考えている。一方、今後の課題としては、低学力の生徒に対する対応が挙げられる。「コミュニケーション活動」によって、「わからない」を言いやすい人間関係を築くことが、ひいては学力向上にもつながると確信しているが、低学力の生徒に関しては、やはり基本知識を習得させる反復練習が必要であることも事実である。誰もが「自分に対する信頼」を高められる手立てについて、引き続き検討していきたい。

## (2) 研修方法の工夫に関する成果と課題

研修方法を工夫することで、1人1人の生徒の変容がわかりやすく見てとれ、本時の課題や問いが生徒の実態に適していたか、追究するにふさわしいものだったかがよくわかった。さらに、こうした検証をすることで改めて確認できたことは、「授業者の生徒との関わり方」が、生徒の「主体的な学び」に大きく影響するということである。授業者の役割は、子ども同士をつなげること、関わりをつくること、生徒の「困り感」を拾って広げてつなげてあげることである（ファシリテーター）。追究のための問いが設定されていなかったり、授業者が話し合いに介入しすぎたりすることで、主体的な学びにならないということも十分に考えられる。授業記録の際の経過時間の記入を徹底し、今後も活用していくことで、生徒全員が主体的に学ぶことのできる授業の実現に近づけるのではないかと考える。



## 4 来年度に向けての方向性

学習指導要領改訂の趣旨をとらえ直し、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」のイメージを共有したうえで、移行措置も踏まえた年間計画の見直しを行いたい。また、カリキュラムマネジメントの実現に向けた教科横断的な取組をいっそう進めていきたいと考えている。

さらに、「見方・考え方」の評価についても、校内研修等で専門的な知識を得て、学校全体でその方法を模索する1年にしたい。

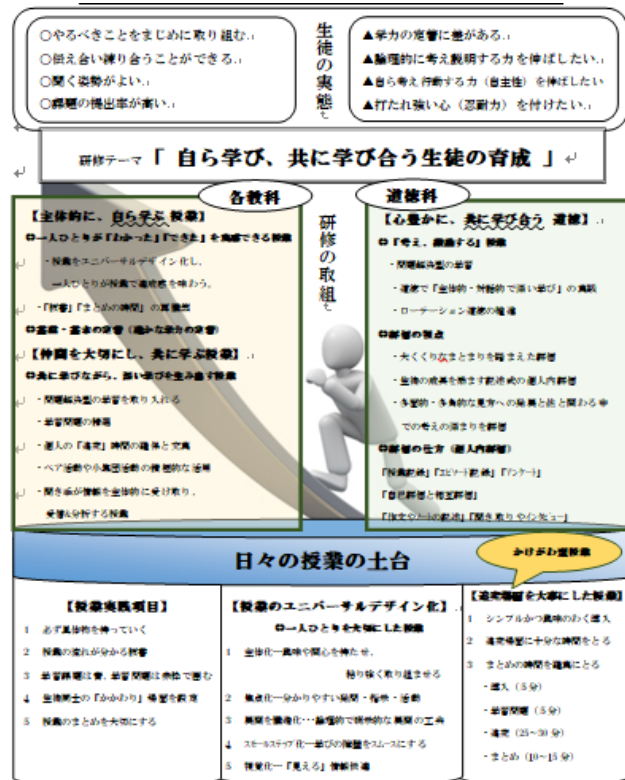
# 自ら学び 共に学び合う生徒の育成

掛川市立西中学校 長谷川 景子

## 1 研修テーマ設定の理由

本校の生徒は、やるべきことをまじめに取り組む生徒が多く、授業をはじめ集会等でも人の話を聞く姿勢がよい。また授業の中で生徒同士が伝え合い練り合うことができる。そんな本校の生徒には、さらに「自ら考え行動する力（自主性）」と「論理的に考え、共に学び合いを深めていく力」を伸ばしてほしいと考え、本年度の研修テーマを「自ら学び、共に学び合う生徒の育成」と設定した。

また、前年度の研修は「学びのユニバーサルデザイン」、「かけがわ型授業」、「西中学園実践項目」、自校の授業実践項目など、目指すべき目標が多岐を絞った話し合いができなかった。その反省を生かし、本年度は新学習指導要領への移行期間に入ることを最優先と捉え、「主体的・対話的で深い学び＝自ら学び、共に学び合う」に焦点を絞って研修を進めることにした。



## 2 具体的な研修の手だてと成果

### (1) 「道徳科」と「各教科」の両輪研修

平成 31 年度道徳教科化に向けた道徳の研修を前半に、全世代の教員の授業力向上に向けた基礎的な研修の重要性も考え、後半に教科の研修を計画し実践した。

### (2) PDCAサイクルを意識した道徳科の研修

- P**…総合教育センターから講師を招聘し、「道徳の教科化」、「考え・議論する道徳」について、教員全員で学んだ。（5月）
- P**…初任者研修（道徳）の会場校に指定されたことを好機ととらえ、各学年1授業の公開に向けて、道徳の授業案を学年職員全員で議論し作成（7月）
- D**…作成した授業案で授業公開者以外が授業を行い学年職員で参観（7月）
- C**…参観した授業の反省と授業案の再検討（8月）

A…再検討した最終授業案で、授業公開者が他クラスで授業（9月）

「どんな発問が生徒のより深く多角的な考えを引き出せるのか」、「生徒がより多面的な見方、考え方ができるようになるには、どんな手だてや対話を設定すればよいのか」など、教員全員が道徳という共通の教科で研修できたことによって、研修テーマ「自ら学び、共に学び合う（主体的・対話的で深い学び）」に迫ることができた。

(3) 「授業設計診断表」をもとに4つの視点を意識した教科別研修

各教科の研修では、総合教育センターの、『授業設計診断表』

(右図)を参照し、自ら学び、共に学び合う生徒の育成にむけて、

「4つの視点」(①解決したい課題や問い②考えるための材料③対話と思考④学習の成果)を意識した授業づくりに取り組んだ。教科別のグループで、授業者一人を決め、その授業案検討や授業参観、事後研修を行った。どの過程においても、「4つの視点」をもって研修を行ったことで、的を絞った深い話し合いができた。しかし、「4つの視点」を意識するあまり、「付きたい力」は何かという授業づくりの根幹部分に対する意識が希薄になるなど課題も見つかった。

**「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業設計診断**

次の表は、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、「アクティブ・ラーニング」の視点から授業設計を診断するものです。各項目とも「★」から「excellent」に向かって確認してください。子供たちが習得した態度や思考力等を、手探として活用・発展させながら学習に取り組み、その中で資質・能力の活用と育成が繰り返されるような指導の創意工夫を促していくことが大切です。各教科の特質に応じた発問を要する発問や考え方（発問・考え方）を働かせることが、学びの「深まり」の鍵になります。また、子供一人一人の興味や関心、発達や学習の理解等を踏まえ、それぞれの個性に応じた学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高めることが重要で、授業中継元の視座に子供の「主体的・対話的で深い学び」の過程が実現する授業設計を構築しましょう。

項目	★	★★	★★★	excellent
<b>解決したい課題や問い</b>  ▲課題や問いが明確ではない。 <input type="checkbox"/>	▲課題や問いはあるが、解決に必要としない。 <input type="checkbox"/>	▲課題や問いがあり、解決に必要とされる。 ▲課題や問いに対する活動の幅が広すぎて、活動が集約化されにくい。 <input type="checkbox"/>	▲課題や問いに対する活動が集約化され、深い学びにつながる対話につながる。  <input type="checkbox"/>	
<b>考えるための材料</b>  ▲考えるための材料がない。 <small>材料とは、道徳、歴史、地理などの教科や資料、動画、写真など。</small> <input type="checkbox"/>	▲考えるための材料はあるが、課題や問いに対する解決策が提示されていない。 ▲材料や解決策を、事前に教師が説明してしまう。 <input type="checkbox"/>	▲複数の視点や立場から考えるための材料がある。 ▲限定的な考えに誘導するものがある。 <input type="checkbox"/>	▲複数の視点や立場から考えるための材料があり、それらと比較、統合することで、深い解決策や答えにつながる。  <input type="checkbox"/>	
<b>対話と思考</b>  ▲対話を通して考える機会がない。 <small>対話とは、授業中継に際して発問や問いをめぐって行う。</small> <input type="checkbox"/>	▲対話を通して考える機会が確保されているが、各自がまとめた内容を紹介するだけである。 <input type="checkbox"/>	▲対話を通して考える機会が確保されている。 ▲教師の適切な助言により、対話や思考が促進されている。 <input type="checkbox"/>	▲対話を通して考える機会が十分確保され、解決策や答えを深めていくような建設的なやりとりがなされる。  <input type="checkbox"/>	
<b>学習の成果</b>  ▲活動だけで知識・技能を習得できない。 <input type="checkbox"/>	▲知識・技能の活用範囲が限定的な学習にとどまっている。 <input type="checkbox"/>	▲学んだことを自分の言葉で説明でき、知識・技能の活用範囲が広がり、振り返りを通して、自己の成長を把握できる。 ▲課題や問いを解決することで満足し、そこに新たな課題や問いが生まれない。 <input type="checkbox"/>	▲学んだことを自分の言葉で説明でき、知識・技能の活用範囲が広がり、自ら振り返って、自己の成長を把握できる。 ▲新たな課題や問いを発見し、次の主体的な学びにつながる。  <input type="checkbox"/>	

### 3 来年度に向けた課題

「自ら考え行動する力（自主性）」や「論理的に考え、共に学び合いを深めていく力」を育むためには、授業づくりという一方的なアプローチではなく、カリキュラムマネジメントという視点を持ち、教育活動全体を通して取り組むことが大切だと感じた。来年度は新学習指導要領を受け止めつつも、まずは教員全員で生徒の実態をとらえ、「どんな生徒を育てたいか」という共通理解（目標）のもとに、研修部、学習部、生活部、特活部、各教科部が連携して手だてを打っていきたい。

## 学びの時間の充実を目指して

掛川市立桜が丘中学校 宮崎 直哉

### 考えを深める手立ての工夫

「教えたことはしっかりできるが、教えていないことはなかなか踏み出すことができない」これは本校赴任時に私が聞いた生徒の実態です。教師からの課題には一生懸命に取り組むが、課題が達成されるとそれ以上先にはなかなか進むことができないということでした。実際に生徒は教師の指示は注意深く聞き、日々の授業にも熱心に取り組む姿が見られました。しかし、課題をこなす姿からはなぜ、それをやるのかという意味を見出していない生徒も多く見られました。

そこで、生徒が主体的に授業に取り組むために、考えを深める手立てを工夫していくことが研修のテーマに設定されました。自分たちで考えながら課題を解決する経験を通して、自ら調べたり、考えたりすることで、与えられることを待つばかりではなく、学ぶことを継続する生徒や学びに前向きな姿勢をもつ生徒にしたいという願いが込められていました。桜が丘中学校に在籍している間に生徒には粘り強く頑張る姿勢や、自分から踏み込んで追究するような姿勢をもってもらいたい、そのために私たち教師は生徒が考える場面を多く取り入れた授業をデザインしていくことになりました。

### 動き始めることの意味

5月の研修主任による道徳の提案授業を皮切りに本格的に校内研修のテーマに沿った授業実践が始まりました。生徒の考えを深めるために必要な資料や教材などがあるか、生徒が考える時間は確保されているか、対話の組み方や内容は適切であるかなど、互いの授業案を見ながら考える日々が始まりました。生徒の活動する時間を充実させるための方法を考える中で、私たち教師にとっての課題もいくつか挙がってきました。

生徒が活動する時間を充実させたいと思うあまり、ジグソー学習などの活動の形態が先行してしまっただけの場面もありました。本来ならば、活動の形態はそれ自体が目的ではなく、手段であるはずです。また、生徒の対話活動を充実させるために、資料やワークシートなどを丁寧に考えたものの、本来のねらいが曖昧になってしまった場合もありました。これは多くの実践に共通して見られたことでした。これらは教師全員が実践を重ねたからこそ見えてきた成果ですが、各教科でどのような知識や考え方を身につけさせたいのか、本当に価値ある活動となっているのか、この点を考えるきっかけになりました。

## “ 個 の 取 組 ” を 見 る 難 し さ

ある先生は体育の授業で創作ダンスを取り上げました。今回は表現技法の「くずし」に着目し、生徒がグループごとに考えたストーリーを体の動きだけで伝えるということに取り組みました。指導案の検討では生徒が自分たちのダンスを振り返り、向上させる場面があるのか、考えるためのワークシートやタブレット端末などの機材は使用できるか、時間は確保されているかという点について議論が交わされました。そして迎えた当日、先生のアドバイスのもと、生徒は実に生き生きとダンスを披露しました。

この授業では、単元を通して自分たちのダンスを考えながら作り上げていく生徒の様子が見えましたが、同時に1つの課題も浮かびあがりました。それは、グループ活動や個の取組を見る難しさです。あるグループでは、発表直前の準備時間に表現の仕上がり具合を確認するのではなく、自分たちのストーリーを伝えるために、ダンスの構成そのものを再検討し始めました。一見すると、このグループだけほとんど活動していないように見えたのですが、話し合っている内容は、ダンスの単元を通したねらいの本質に迫るものでした。しかし、これはこのグループに寄り添い、じっくりと見て、聞かなければわからないものであり、通常の1人で行う授業では各グループの学びの瞬間を見るのが可能なのか、またどのようにしたら個別の活動の評価ができるのかということも話題に挙がりました。もちろん、評価は授業のねらいと一体であり、事前に見るべきポイントは絞られているはずですが、生徒の活動時間が確保されていれば、それだけ教師の予想を超えた学びの瞬間に出会うことも多くあります。生徒の瑞々しい学びの様子を見ることの方法や教師の視点も今後の課題として残りました。

## 大 局 的 か つ 焦 点 的 に

生徒にとって意味のある学びの時間にするために、生徒が考える時間を確保し、その手立てを工夫したい—この取組のもとで、グループ活動の形態、使用する教材、まとめの振り返りの時間の工夫など多くの課題が挙がってきました。たくましく学ぶ生徒を育てるという最終的な目標は保ちながら、今年の実践から上がってきた細かな課題を整理することが大切だと思っています。授業づくりの意識や考え方、生徒の学びを見ることなどの本質的な課題を忘れることなく、本校の生徒に寄り添った授業観の共有こそが、今年の実践を来年度に繋げることになると感じています。





# 「夢を抱き りりしく歩む 原野谷っ子」であってほしい！

掛川市立原野谷中学校 梅田 晃

## 原野谷中生は素直で、まじめで、授業や行事に一生懸命取り組みます！

私が原野谷中に赴任して早や2年、最近つくづく思うことは、原野谷中の子どもたちは本当に純粋で、心優しく、授業や行事に一生懸命に取り組むということです。授業中は課題に真剣に取り組む、発表も積極的です。その傾向は学年が上がるにつれ顕著になります。これまでの私の経験上、学年が上っていくと、意見を言うことに消極的になる子どもたちが増えていくように思います。しかし、原野谷中生はその逆で、学年が上がるごとに自分の意見を積極的に述べようとする生徒が増えていくのです。また、体育祭や合唱祭などの学校行事や学年行事等に本当によく取り組みます。「この子たち、なんでこんなに頑張れるんだろ?」と思ってしまうほどです。そんな子どもたちだからこそ、教職員は毎日笑顔で教壇に立ち、また、子どもたちも笑顔で学校に通ってきます。原野谷中ほど先生と生徒の仲が良い中学校はなかなかないのではないかと思います。

## 他者の考えを理解し、自分の考えを分かりやすく伝えることは苦手？

「なんじゃこの解答は?」「問題の意味分かっているのかな?」「これ超珍解答!」これらは昨年度、職員室でたびたび聞かれた言葉です。「ちょ、ちょ、ちょっと待って!何のこと話しているの!?!」「言っていることがまったくわからないんだけど」私が時々教室で口にしたことです。すごくまじめで、純粋で、物事に一生懸命取り組むことができる原中生ですが、どうも他者(友達や教員、物語の作者、問題文)の考えを理解し、自分の考えを分かりやすく伝えることは苦手なようです。その証拠に、本年度の全国学力学習状況調査では、国語A、国語B共に「話すこと・聞くこと」「読むこと」に関する問題の正答率が、県平均と全国平均を共に下回っていました。特に「話すこと・聞くこと」に関しては、県平均と全国平均を共に下回っていました。「このままじゃ、原中生は社会に出たとき苦労するよね。」「何とか克服しないとイケない課題だよね。」このような教員たちの悩みから、本年度の授業研究がスタートしました。

## 各教科の特性を生かしながら、目指す生徒を育てていこう！

本年度の研究主題を「他者の考えを理解した上で、自分の考えを分かりやすく伝えることができる生徒」の育成とした上で、自分の考えを分かりやすく伝えることができる生徒の育成としました。それを実現するためにはどのような仮説を立て、どのような手立てを講じたらよいか。校内研修で教員一人一人が考えました。すると、先生によって、仮説と手立てが実にさまざまであることが分かりました。それらは先生方の経験と、生徒理解力、そして専門とする教科の特性に裏付けられていることが分かりました。原野谷中では全教員が、研究主題に迫るための仮説と手立てを個々に設定し、授業づくりを行っています。

研究主題 「他者の考えを理解した上で、自分の考えを分かりやすく伝えることができる生徒」の育成				
教科名	領域	仮説	手立て	評価方法
国語科	山本	読者の感情移入、相対的感情移入、読者の感情移入の習得・活用ができれば、文章の理解力が育成されるだろう。	3つの感情移入力を習得・活用させる。	4つの感情(読者・著者・語り)において、感情を3つの感情移入能力に結び、その結果を評価する。
社会科	大野	物語に登場する、事象は自分自身で説明し、納得するまで進んで「おもしろい」仮説を立て、自分の考えを伝えたい思いをもった生徒が増えてくるだろう。	読者・登場人物による仮説を、読者・登場人物の小学生にむかひながら説明させる。 読者・登場人物の心情や態度による仮説を説明させる。 読者の立場に即した仮説を設定する。 登場人物の心情や態度による仮説を設定する。	レディングシートと授業内容の授業録にも実施し、比較する。 読みとくための仮説の育成を評価する。
数学科	青木	読者の考えを説明し、読者の考えを自分の考えと対比し、読みとく仮説を設定し、納得するまで進んで「おもしろい」仮説を立て、自分の考えを伝えたい思いをもった生徒が増えてくるだろう。	3つの感情移入能力を習得・活用させる。 読者・登場人物の心情や態度による仮説を設定する。 読者の立場に即した仮説を設定する。 登場人物の心情や態度による仮説を設定する。	読者シート上で説明する理由を説明する理由を記入。 読者シート上で説明する理由を説明する理由を記入。 読者シート上で説明する理由を説明する理由を記入。
理科	山本	読者の考えを説明し、読者の考えを自分の考えと対比し、読みとく仮説を設定し、納得するまで進んで「おもしろい」仮説を立て、自分の考えを伝えたい思いをもった生徒が増えてくるだろう。	読者・登場人物による仮説を、読者・登場人物の小学生にむかひながら説明させる。 読者・登場人物の心情や態度による仮説を説明させる。 読者の立場に即した仮説を設定する。 登場人物の心情や態度による仮説を設定する。	レディングシートと授業内容の授業録にも実施し、比較する。 読みとくための仮説の育成を評価する。
音楽科	青木	読者の考えを説明し、読者の考えを自分の考えと対比し、読みとく仮説を設定し、納得するまで進んで「おもしろい」仮説を立て、自分の考えを伝えたい思いをもった生徒が増えてくるだろう。	読者・登場人物による仮説を、読者・登場人物の小学生にむかひながら説明させる。 読者・登場人物の心情や態度による仮説を説明させる。 読者の立場に即した仮説を設定する。 登場人物の心情や態度による仮説を設定する。	レディングシートと授業内容の授業録にも実施し、比較する。 読みとくための仮説の育成を評価する。
保健体育科	三浦	読者の考えを説明し、読者の考えを自分の考えと対比し、読みとく仮説を設定し、納得するまで進んで「おもしろい」仮説を立て、自分の考えを伝えたい思いをもった生徒が増えてくるだろう。	読者・登場人物による仮説を、読者・登場人物の小学生にむかひながら説明させる。 読者・登場人物の心情や態度による仮説を説明させる。 読者の立場に即した仮説を設定する。 登場人物の心情や態度による仮説を設定する。	レディングシートと授業内容の授業録にも実施し、比較する。 読みとくための仮説の育成を評価する。
外国語科	林	読者の考えを説明し、読者の考えを自分の考えと対比し、読みとく仮説を設定し、納得するまで進んで「おもしろい」仮説を立て、自分の考えを伝えたい思いをもった生徒が増えてくるだろう。	読者・登場人物による仮説を、読者・登場人物の小学生にむかひながら説明させる。 読者・登場人物の心情や態度による仮説を説明させる。 読者の立場に即した仮説を設定する。 登場人物の心情や態度による仮説を設定する。	レディングシートと授業内容の授業録にも実施し、比較する。 読みとくための仮説の育成を評価する。

## 外国語教育における実践

「他者の考えに対し、自分の考えや気持ちを整理し、その後意見を述べる場面を設定すれば、目指す生徒を育成することができるだろう。」このような仮説を立て、具体的な手立てを次のように設定しました。

- (1) 生徒が考えたくなる、意見を言いたくなる学習課題（問題）の設定
- (2) 友達の意見や考え、問いを必然的に聞く場面の設定
- (3) 具体物を利用した発表の指導

### レストランでかっこよく食事をオーダーしよう！

「レストランでかっこよく食事をオーダーできるようになろう!」、2年生Lesson4の単元末の目標をこう設定し、円滑にレストランでのやり取りができるようになるために単元を構想しました。前半3時間は教科書の内容と新出言語材料を押さえ、次に第7時のレストランでのやり取りに関するパフォーマンス・テストに備え、個、ペア、グループで、レストランで想定されるやり取りの練習を行います。この際、子どもたちは1年次に学習した「会話を継続させるための表現」の復習と、教科書に登場しない表現等を、インプットシートを用いて練習しました。教科書の対話文をそのまま暗記しているだけでは、相手からの予期せぬ質問等に対し対応できない可能性があるからです。第7時には、客に扮した生徒一人一人が店員役の教員とレストランでのやり取りを実演しました。写真にあるように、教室の一角をレストラン風に飾り、教員がウェイター、生徒が客になり一対一のやり取りを行いました。

注文する料理は生徒が初めて見る本物のメニュー表に書かれたもので、初めて開くメニュー表から情報を瞬時に読み取り、注文をしなければいけません。料理内容について、生徒がウェイターに説明を求める場面もあるため、ウェイターから説明される料理も初めて耳にする内容です。これを理解し、再び対応しなければならぬため、まさに即興的なやり取りが求められます。



教科書本文やインプットシートで学ん

だ基本表現を基に、レストランでの注文を即興的に行えるようになることは容易なことではありません。しかしながら、実際の場面を想定した練習や、班で互いにアドバイスをしながら対話に磨きをかけたことによって、多くの生徒が円滑にレストランでのやり取りを行うことができました。生徒のゴールの姿を想像して単元を構想し（Plan）、それに向かわせるための手立てを実践し（Do）、生徒のパフォーマンスをテストし（Check）、生徒の新たな課題を見いだしながら、次の単元の学習をイメージする（Action）実践の成果だと捉えます。

本年度、各教科でこのようなPDCAサイクルに基づいた授業を展開しながら、「他者の考えを理解した上で、自分の考えをわかりやすく伝えることができる生徒」の育成を目指した取組が行われています。本年度の終わりには教職員の口から「〇〇さんは本当に理解力があるね」「〇〇君は表現が豊かで、伝えたいことがよく分かるな」と言われる子どもが少しでも増えることを願っています。

## 学校の中で終わらない学びを目指して

---

掛川市立北中学校 飯田 好洋

### 「学ぶ理由」を語る事ができる集団を目指して

「生涯にわたって学ぶことを続けていける生徒であってほしい。そのためには教師も生徒もなぜ学ぶのかを語れるようであってほしい。」今年度の研修を考える中で大切したいと思ったことです。知識や技能を習得する授業やそれらを身につけた上での話し合いを通して、考えを深める授業が大切なのは分かっていました。しかし、学び手である生徒は中学校を卒業してからも学びが続いていきます。社会に出てからも様々なことを学び続けていきます。そして我々教師も日々学び続けています。私たち教師は学びが中学校の中だけで終わることなく、生徒が生涯にわたって学び続けていけるように「学びの実感を積み重ねる授業」を考え続ける教師集団でありたいと思いました。昨年度から研修テーマを「学び合い高め合う授業」とし「真に意味のある小集団学習」と「“なぜその教科を学ぶのか”に答え得る教師」という二つの柱で研修を進めてきました。本年度は全く新しいことにチャレンジするのではなく、昨年度からの研修をより充実・深化させていくことにしました。目指す小集団の姿に向けた学習活動を通して、一人では実感できない学びの良さを体験し、各教科の付けたい力を授業を通して身につけていく。そんな姿をイメージして、今年度の研修テーマに迫っていききました。

### 小集団学習を通して学びの本質に迫る

授業の中に小集団活動を取り入れる。ともすれば小集団活動ありきの授業になってしまうのではないか。そんな不安もありました。しかし子どもが主体となって学ぶ小集団活動、本時の目標を達成するための小集団活動が意識されるようになりました。社会科の授業では、ジグソー学習を通して、「なぜ中国の工業が発達したのか」について考えました。一つの事象を多面的に考えることを通して「では、日本はどうなのか。これからの日本はどうするべきか。」など新たな疑問も生まれました。理科では小集団でまとめた実験結果を他のグループと比較検討する中でより精度の高い実験結果を得ようとしていました。複数グループの実験結果に、関連性をもたせることで新しい発見や予想と違うことに気づくことができるようになりました。さらに実験結果をモデルを用いて説明し、なぜそうなるのかを論理的に話し合う姿も見られました。教科の学習内容を学ばせながらも、多くの先生が教科をとおして身につけさせたい力の育成を進めていくようになり、教科の本質を踏まえた授業を展開しました。先生方の教科観や授業観が感じられるものは、生徒にとって教科を楽しんで学んでいると同

時に教科をとおして身につけさせたい力が着実に身につけているのではないかと思います。授業に対する先生方の意識が変わり、それを受け生徒の授業に対する意識も変わっているのではないかと感じました。

### **具体的な「目指す小集団の姿」を教師がイメージできること**

「目指す小集団の姿」は発達段階に応じて設定した目指す生徒の姿です。1年生は、具体的な姿でイメージしやすい姿でしたが、学年が上がるにつれ、教師が求める小集団の姿はよりレベルの高いものになり、表現も抽象的な姿となりました。抽象的な表現によって、「自分の教科での姿はどんなものか」をイメージしにくくなりました。ですが学年部ごとの研修を進めていく中で「自分の教科では、こんな姿が見られるようにしていきたい。だからこんな手立てを打っている。」「例えば〇〇の教科ならこんな手立てを打って見たらどうか」というような話し合いができるようになっていきました。目指す小集団の姿の具体像を学年の中で共有していくことで、少しずつですが、抽象的だった姿が、目の前の生徒の具体的な姿で見られるようになってきました。この「目指す小集団の姿」の最終到達点が「本校での3年間の学びの集大成」であってほしいと願っています。どの先生方も、そして生徒たちも「北中で学んできたからこんなことができるようになった。」と語れるようになっていきたいです。

### **教師も生徒も集団の中で学び続けられるように**

「生涯にわたって学び続ける」生徒がそうであるように、教師もそうでなければなりません。同じ学年内で、小集団学習の方法や目指す姿、達成度について確認していく。同じ教科担当同士で、学校生活の中でその教科を学ぶ意義について話し合っていく。そんな授業観や教科観が集団として成熟していけるようになったら、教師と生徒で「学ぶ理由を語るができる」授業を目指していけるはずです。そんな授業を実践していければ、生徒は社会に出てからも自らが学ぶ理由を考えるようになるだろうし、教師は授業を見つめ、更に生徒を伸ばしていこうという意識にもつながると思います。そのために授業の中で「真に意味のある小集団学習」をより深化させていくことが大切だと考えます。生徒は自分の意見を持ち、他者と交流する中で深めていく。教師は教科でのつけたい力に迫ることができるような小集団学習を進めていく。その姿をイメージし、生徒にどう問いか、何を考えさせていくか。私達教師の「発問」の質を更に上げていくための研修を、来年度は今年度以上に力を入れていくべきことだと感じています。



# 「生徒が主体的に追究・表現する授業」 ～一人一人の学びの深まりを目指して～

掛川市立城東中学校 小杉 栄乃

## 「考える」「伝える」「聞く」「高める」

本年度は校内研修テーマを「生徒が主体的に追究・表現する授業～一人一人の学びの深まりを目指して～」とし、授業では、「自らすすんで考え、意見を言える」「友達の意見を聞き、自分の考えを高められる」生徒の育成を目指して実践を重ねました。

### 授業改善の道 ① —7月、第1期公開授業から



教員の校内研修

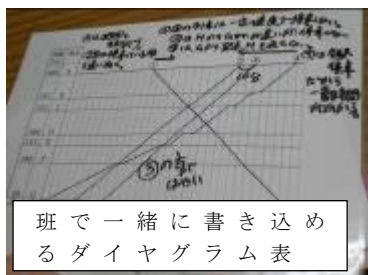
#### ～2年国語科「盆土産」～

「一人一人の学びの深まりを目指す」ための手立てとして、深い学びを実現する学習問題の設定と、小集団活動を充実させることに重点をおき、PDCAサイクルを意識しながら、年2回のグループ研修を行いました。グループ研修を7月までの1期と10月までの2期に分け、7月の研修内容をその後の授業実践に生かし、10月の研修でもう一度振り返りをしました。公開授業では、一人一人の変容を見取るために、授業の前後で比較することができる振り返りシートを用いて、参観者が生徒の変容を記入し、事後研修に役立てました。

第1期の公開授業では、生徒の変容から、手立てや活動の有効性を探り、共有を図りました。2年生国語科では「盆土産」の単元で、「物語のテーマを具体的な表現描写から考える」活動を通して、読み方の多様性を知りました。また、班での話し合いや発表をもとに、物語のテーマを具体例に挙げながら個人で300字にまとめるとい授業を行いました。初めは今と昭和40年頃の時代背景の違いにしか気づかなかった生徒が、班での話し合いや友達の発表を聞くことを通して、家族愛という物語の主題にせまることができました。これは小集団活動の中で自分の気づいたことや疑問点を発表し、自分とは違う視点をもった友達の意見を聞くことで、自分の考えを再構築することに至った一つの良い例としてあげられます。しかし、初めからテーマの家族愛に気づいていた生徒の変容はあまり見られず、小集団活動が「意見の深め合い」ではなく「教え合い」にとどまっていたとも考えられ、「一人一人の学びを深める」学習問題の設定の難しさを感じました。

## 授業改善の道②—9月、第2期公開授業～2年数学科「一次関数」

9月の公開授業では、第1期の課題の「一人一人の深い学びにつながる学習問題」と「よりよい小集団活動」を目指し授業実践を行いました。2年生数学科「一次関数」の授業では、「ダイアグラムを読み取ろう」という学習問題で、交点や直線の傾きなどいくつかの視点をもたせて学習問題の焦点化をはかりました。複数の情報をもとに、グラフの読み取りを行うためには、一つ一つの情報を精査していく必要があります、生徒は対話を通して確認したり、新しい気づきをもったりすることができました。初めは一つの視点しかもてなかった生徒が、班での話し合い活動を通して複数の視点でグラフの読み取りを行うことができるようになり、その中でよりよいものを選択するために考えを再構築していく過程がみられました。これは、学習問題にせまる解決方法が複数あり、複数の情報があったために数学の得意な生徒にとっても小集団活動を行った価値の高い授業でした。一方で、一人一人の読み取りが不十分で、話し合いが深まらなかった班もありました。「深める」ことのできる学習問題であっても、最後は一人一人の読み取りが十分できないと自分の考えを構築できないという課題が残りました。



班で一緒に書き込めるダイアグラム表

## 成果と課題

本年度の校内研修では、生徒に主体性と表現力を育みながら「一人一人の学びの深まりを目指す」授業を考えてきました。学習問題や小集団活動の工夫等により、積極的に問題に向かっていく生徒の姿が多く見られました。「自分の意見を言う」ために考え、「友達の意見を聞いて再考する」という流れが定着しました。生徒の発言や表現活動の量も徐々に増えてきました。その点では、校内研修で目指した生徒の姿に近づくことができたのではないかと思います。しかし、小集団での話し合いの深まり、一人一人の考えの深まりといった「学びの深まり」の点で課題が残ります。また、小集団から全体の学びに広げていく展開の工夫や効率化なども考えていく必要があります。

## 来年度に向けて

来年度は、城東学園小中一貫教育の掛川市指定研究3年目を迎えます。佐東小、中小、土方小の3校と連携し、「コミュニケーション力」を育てる授業研究をすすめます。小中4校の研究テーマをそろえ、「対話を通して考えを深める授業づくり」を行います。小集団活動等の手立てを共有し、今の小学生が安心して中学に入学し、安心して学び続けることができるよう、城東学園の教職員が一丸となり、「城東を愛し、未来をたくましく生きる子どもの育成」を目指します。

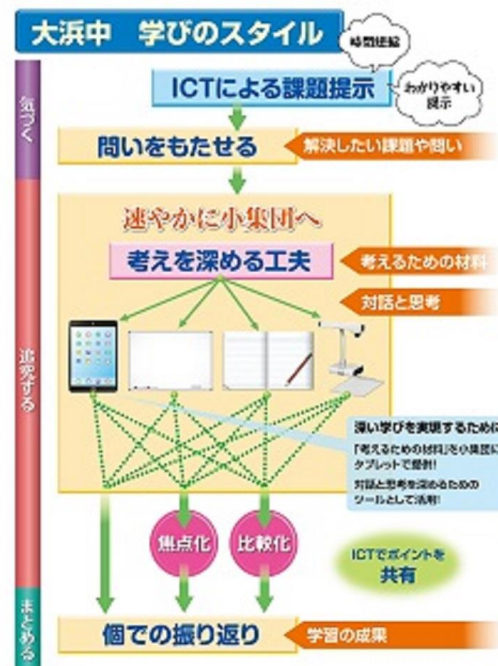
# 「深い学び」を追究する校内研修

掛川市立大浜中学校 大杉 鏡康

## 「大浜中学びのスタイル」を柱に

本校が目指す生徒の姿は、小集団学習等での他との関わりの中で「わかった」「できた」を実感することで、「もっと学びたい」「もっとわかるようになりたい」と思う生徒です。

そのために、本校は「大浜中学びのスタイル」にもとづいて授業実践を行うことを研修の柱にして、職員全員で実践していくことにしました。具体的な取組としては、コの字型隊形、ICTによる分かりやすい課題提示、できるだけ早く小集団にする、その際、考える材料をタブレット等で提供する、「対話・協働」を授業の中心とする、ICTによる焦点化と比較化でポイントを共有する、学びを実感できる個での振り返りを行うなどです。



## 実践に基づく校内研修

今年度、本校は4回の中心授業を行いました。細案を作成し、職員全員で授業を参観しました。講義で知識を学ぶことも大切ですが、実際に授業を行い、職員全員で分析することで、一人一人が自身の授業改善に役立てることができると考えました。また、細案を作るにあたって、研究推進委員会や場合によっては職員全員で授業案を検討し実践していき



## 「深い学び」を見取る事後研修

今年度から子どもたちの深い学びを見取るため、抽出生徒や抽出班を定め、その表れをもとに事後研修を行いました。見るポイントを定め、同じ土俵で協議をすることで、生徒の学びの深まりを考えることができます。「あの発問に対し、〇〇さんはこのような発言をしていた」



「Aグループではこのような考えが出ていた」といった生徒のあらわれをもとに、生徒の考えの深まりやよりよい授業にするための手立てについて議論することができました。

## 「深い学び」の追究

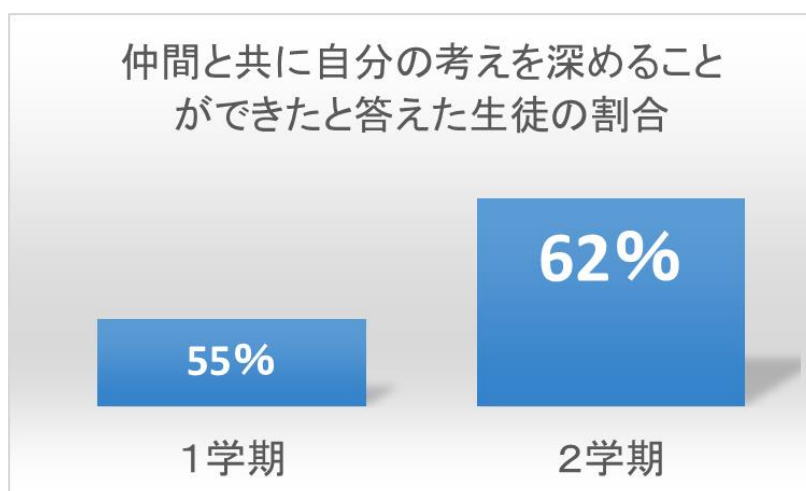
このような取組を続けた結果、生徒を対象に行っている授業評価アンケートは以下のようにになりました。

「仲間と共に自分の考えを深めることができたか」という問いに対して「あてはまる」と答えた生徒の割合が1学期に比べ、7%増加しました。

教師が実践した手立てについての数値ではなく、その結果、子どもが

どのように感じたかという「OUTCOME」に関する表れで数値が伸びたことは大きな収穫です。

しかし、まだ課題もあります。「深い学び」のとらえ方です。年度当初に職員で話し合ったとはいえ、授業を通して深まった子どもの姿がまだ明確ではないことが、事後研修の話し合いの中で話題に上がりました。ゴールのイメージを明確にし、それに向けて有効な手立てを考え、よりよい授業改善をしていく必要があります。大浜中のものがたりはまだ始まったばかりです。これからも学校全体で「深い学び」を追究し、授業改善に取り組んでいきます。





# カリキュラム・マネジメントを取り入れた授業改革

掛川市立大須賀中学校 川中 瑞貴

## これからの社会に求められる資質・能力の育成を目指して

本校では、「目標創出型授業（益川、2015）」と「カリキュラム・マネジメント（県教育センターとの研究協力）」の実践を積み重ねることで、これからの社会に求められる資質・能力の育成を目指してきました。特に今年度は、昨年度に作成した「カリキュラム・マネジメント」の授業計画を基に、授業を行いました。

## 「防災教育」を取り入れた授業展開

カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）の考え方から、本校では「防災学習」を軸とした、各教科間の学習内容の接続を行いました。今年度は、中心授業3回と公開授業週間（9月）など、様々な場面において公開授業を行いました。その中から2つの実践を紹介します。

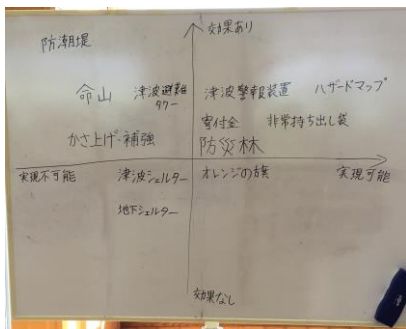
### 《 2年生社会科「災害から大須賀住民を守ろう！」（9月28日実施） 》

#### 本時の目標

座標軸を用いて大須賀で有効な災害対策を比較・検証する活動を通し、大須賀地区に住む一人として、地域の災害による課題について問題意識をもち、住民を災害から守るための対策を練ることができる。

#### 本時、単元におけるカリマネ

- ・「防災教育」（総合的な学習の時間）→地震、津波対策
- ・「地震発生のメカニズム」（3年理科）



大須賀でどのような災害対策ができるのかを、座標軸を用いて考える。地域の現状についても触れながら、大須賀にふさわしい対策を練る。

### 《 2年生理科「なぜ台風は日本にやってくるのか。」（11月15日実施） 》

#### 本時の目標

台風がどのように発生・発達し、どのような動きをするのかを調べ話し合う活動を通して、台風の進路を気団と関連づけて説明することができる。

#### 本時、単元におけるカリマネ

- ・「防災教育」（総合的な学習の時間）→気象災害への対策
- ・「風（季節風・偏西風など）や、各地の気候と暮らし」（1・2年社会）
- ・「天気予報士になって英語で説明しよう」（中2英語）



台風のメカニズムを教科書で学んだ後、その知識を生かして、猛威をふるった台風24号について、他の台風とどう違ったのかを、気団や偏西風、季節風と関連づけて考察する。台風の進路や強さについて考えることで、実際の災害への早期対応に役立てることができる。

## これからのカリマネ教育のために～2年間の研修から～

### 《 成果 》

- ・他教科の動きが分かり、自分の教科だけでなく、全体の流れを見た上で、自分の教科に必要なことについて意識しながら指導することができた。
- ・「防災教育」を軸にするという同じ思いをもつことで、学校全体がまとまった。
- ・他教科で学んだことを生かせるため、生徒がより意欲的に授業に取り組める。
- ・自然災害が多発している現状から、防災を軸にした学習に対して必要感を感じ、学習意欲の向上にもつながった。

### 《 課題 》

- ・「教科横断的に…」や「防災教育と関連させて…」と意識すると、「つなげる」ことが目的になってしまいがちであるため、教科の本質や目指す子どもの姿を見失わないように注意が必要である。
- ・教科間のつながりを考えたときに、校内テストや学力調査の日程との絡みもあるため、タイミングの調整が難しい。
- ・「防災教育」というくくりで考えたとき、教科によっては難しい部分がある。

### 《 研修を通して感じたこと 》

カリマネを行うためには、前年度からの準備が必要不可欠です。本校でも、昨年度の校内研修で、他教科の教員との話し合いの機会を設けました。それにより、他教科の教科書や年間計画を見せ合いながら、自分の教科とのつながりを考えていくことで、次年度の実践計画を立てることができました。また、話し合いの中で、接続できそうな内容を多く見つけることができたため、自分の担当教科の指導方法を見直したり、より効果的な指導方法を見つけたりすることができました。

授業案作成の際に、「防災教育」につなげなければならないという思いが強すぎて、その教科で本来の付けたい力や資質・能力から離れてしまうことが度々ありました。それでは本末転倒になってしまうため、カリマネは飽くまでも手法であることを忘れてはなりません。

カリマネを効果的に用いることができれば、切実感のある問いを生んだり、学習意欲を上げたりすることができそうです。追究したい問いに対して主体的に学ぶことができる生徒の育成にもつながることでしょう。今後、さらなる研究が求められます。